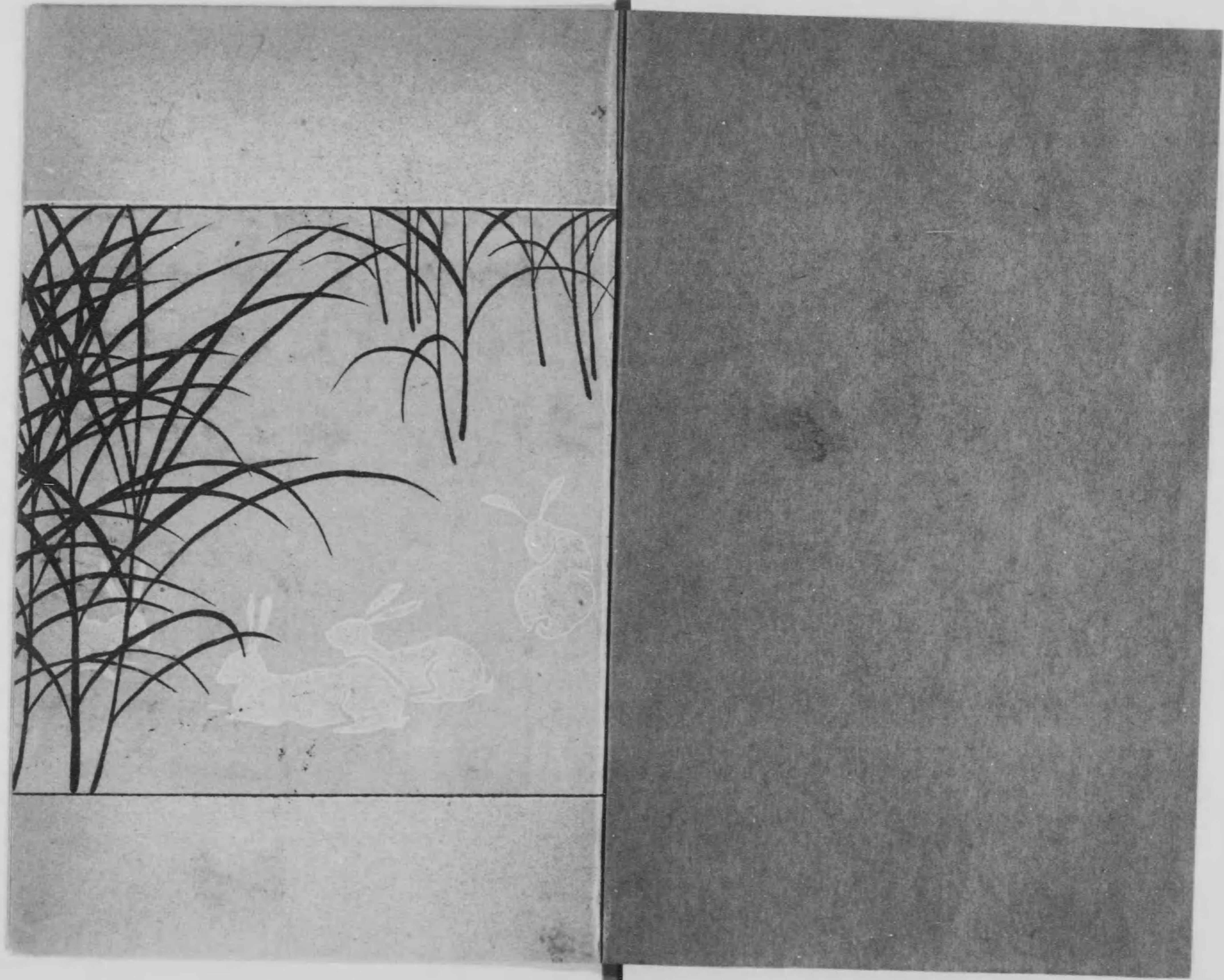


R912.3
MA57



始









古今謠曲解題

大正
9. 1. 22
寄贈

觀世流改訂本刊行會藏版

3744/1
R
12.3
MA57

文學博士 和田萬吉序

丸岡 桂著

丸岡明子寄贈本

LIBRARY
MAY 19 1922

EX-118
MAY 19 1922

丸岡 桂君略傳

丸岡桂君者丸岡莞爾嗣子也母下田氏喜久子君明治十一年十月七日生於東京資性聰明幼而長和歌又善謠曲及長專修文學令名漸著明治三十五年編纂國文大觀十卷四十年慨謠曲書之不備統一其用字及曲譜刊行觀世流改訂謠本二百餘番爾後訂正數次至大正版殆入於完璧之域矣宜哉是書一出於世謠曲之盛前古無比兒童走卒不復俗歌蓋謠曲界之中興也君之於文學最致力於謠曲謠曲之發達變遷辭句之解釋典據先人之所未能審者因君之研究略盡矣大正七年八月得病八年二月十二日歿享年四十二君之夫人稻吉氏有三男三女長子名明

大正己未二月十四日

松下大三郎誌

大正五年二月十四日

於大三大浪菴

四十二卷之夫人辭吉丑亥三更三文具于各眼

辭決人之視未前審者因性之兩突細盡矣大正八年八月辭八辛二月十二日與幸辛
對辭燭蓋編曲界之中與此性之欲文學最輝也欲編曲蓋曲之幾藝變藝續同之續辭典
燭夫至大正頭欲入欲完望之誠矣宜姑曷書一出欲冊編曲之繼前古無其兒童去卒不
四十辛辭編曲書之不辭錄一其用字及曲體既行購冊新如信滿本二百餘番爾辭信五
觀即悅而具味細又善編曲及具專辭文學令各漸養即信三十正辛辭纂圖文大購十卷
皮岡林書卷皮岡茨爾編于出母丁田丑喜八千信即信十一辛十月十日主欲東京資封

皮岡 林書細辭



謠曲はもと文詞を主として發芽したもので、その最も原始的の姿は單に歌章のみで動作を伴はなかつたもののやうに解せられる。然るに次第に發達しては動作を伴ふやうになり、遂には動作を主として歌章を従とするが如き曲も出て來た。最後の種類中には、謠物としては餘り榮えぬけれど仕ぐさの上ではなかく面白くもあるものは、現行の二百曲ばかりに就いても稍多くの好例を摘出し得るのである。併しながら此仕ぐさを主としたものは文詞よりも脚色、脚色よりも表現法が巧で無ければ、謠曲として殆ど價值の無いものになり易い。其處に行くと、文詞に重きを置いた曲は既にそれだけで聽くべき價值があるので、縱令之を舞臺の上に登さずとも、單に謠物として其生命が存するのである。早

い時代に出来た諸曲には此類が多い。後年能樂の盛行するに連れて新曲が夥しく作り出されたが、それらの多數は仕ぐさの上で落を取らうとした處から、構造は古作の型式を學ぶに止めて何等の新機軸を出さず、文章も極めて平凡で概ね古曲の糊篋にて事を濟ませ、特に題材にのみ著目して舞働の上で聊か變つたふしのあるものと云ふやうなのが多かつた。處で何時の世にも名作は澤山に出来ぬ。殊に仕ぐさ一點張で行かうとする事が寧ろ能樂の本性に合はぬものであつた爲に、又自體鈍作を舞働の力で活かせると云ふ事が孰の樂師にも望める譯で無い爲に、主ら題材と表現法とを憑みにした曲は自ら世人に顧みられぬやうになつた。又今一つには後世になればなる程新曲を作る事其事が樂みであるばかりで、

其曲を面白くするとせぬとには頓着せぬと云ふ傾向が生じたので後年の諸曲は結局多作即ち濫作即ち悪作の謗を免れぬ。二百番以外、三百番以外、四百番以外等の謡曲が貞享元祿の頃僅に一回刊行されたぎりで其後は復と世に出ず、結句古版の二百番が依然として命脈を傳へて疊版又疊版以て今日に至つたのも、此等の理由に基くと謂つて差支無からう。熊野松風に米の飯は今とても同じこと。代用食は藝術の世界では到底行はれぬのである。

併しながら特に謡曲や能樂を系統的に研究する者に取つては、古往今來如何なる曲が作られたか、而して其中には史實傳説の如何なるものが題材に採られ、國俗民習の如何なるものが構想に入つたかと云ふことを知るのが、筋の巧拙論や詞の妍醜沙汰以外に

一の緊要件である。此問題を基礎に置かずに諸曲を論じようとするのは、恰も曉天に残つて居る數點の星を仰いて天文の全體を説かうとするのに等しい。然るに世間の諸曲論者は只今日吾人の耳目にする所の諸曲中の更に或小部分を擧げて、斯物に就いての要領を得ようとするのは、大なる考違ひである。今は廢亡して居る諸曲に就いても相當の穿鑿をして、それらは何が故に然廢亡の運命に遭つたかを觀ねば、諸曲の源委沿革を明かにするとは謂はれぬ。卑近の例を取つて言ふと、今日行はれて居らぬ數百曲の中に古代支那の歴史及傳説に關するものを主題としたものが頗る多いが、其らは脚色とか話とかとしてこそ面白いかも知らぬが、何分にも習俗が殊なり人情も同じからぬ外國人の行跡を敘する事も之

を恣態に表現する事もむつかしく、それが爲に行文も作曲も氣勢の揚らぬ結果を生じて、所謂小題大做の反對の大題小做に陥つてしまつた。又日本の事件を題にしたものの中で、古曲では既に幽靈物で採つてあるのを更に現在物にしたり、又古曲では現在物であるのを新に幽靈物にしたりして、表裏の觀察方を見せようと試みたものも稍多くあるが、是も強て作つた嫌があるので、大抵失敗に終つてしまつた。其外新曲の行はれずじまひになつたものの種類を網羅することは爰にはせぬが、中には此くの如き題材までが諸曲に取入れられたかと吃驚するやうなのすら有る。總て此ういふ事を究め盡した後始めて諸曲の大勢を見ることが出来るのであらう。

但困難なことは、今日までに作られた諸曲の殆ど總てを手に入
れて通覽するの一事である。是は餘程熱心で而も少からぬ日子を
費してかからねば出来ぬ業であるから、おぼろげの學者には望み
難い。ひとり茲に故丸岡桂君が在つて諸曲の基礎的研究の道を開
き、其半生を新古諸曲の採訪鈔寫覆刊等に委ねられたが、惜しい
ことには業未だ央ならざるに卒然として逝かれた。唯幸に生前最
後の著述たる「諸曲解題」の一編を遺されたので、君が折角研鑽の
端緒だけは窺はれる。抑何事の研究も其事物に關する文籍の系統
的記載即ち解題目錄に始まると云ふことは、輒近の學問界に於け
る通論である。丸岡君の此著は實に今後の諸曲研究家の爲に無二
の槩となるもので、彼等が之に頼つて色々の發明の山口にさしか

かる便宜は測知し難い程多いであらう。

自分と丸岡君との交際は君の晩年に始まり而も極めて淺かつた
が、非凡の精力家且熱情家であつた事は僅々兩三度の會合でも判
つた。若し自分が今少し早く君を識つたなら、又は君にして更に
十年二十年の壽を増されたなら、自分は君に接して其蘊蓄に受益
する機會も多かつたらうにと至極遺憾に思つて居た。處が此程に
なつて君の遺著に本書の如きがあると知つて、君の精力並に熱情
の餘澤が歿後永く同一方面の研究家に及ぶことを喜び、且は遺稿
の整理に力を盡された安藤東庵君が故人に對する友情の篤いのに
感じて、同君の需のまゝに一言を本書に弁することとなつた。解
題の事業が何でも無ささうに見えて、實はなかく面倒なもので

あることは、少か経験ある自分の述べたい處であるが、今は具眼の付度に任せて置く。

大正八年十月日

率菴和田萬吉識す

凡例

一故丸岡桂氏の謡曲研究に従事せらるゝや、先づ謡曲に関する古版本及び古寫本の蒐集に力め、其聚藏せられしもの數百部の多きに至る。本書の第二附録として卷末に掲げたる「丸岡氏猿樂文庫藏書目録」即ち是なり。但し該書目は、藏書中番號札の貼附せられたるもののみを掲ぐるに止め、近年購入せられしもの並に明治大正の出版に係る活版本は、番號の記入なく、又之が整理の暇もあらざれば、總べて之を省略せり、たゞ之によりて氏の研究が最も確實なる材料を基本とせられし一斑を察するを得んか。

一斯くの如く氏は古書の蒐集に力め、又博く諸家秘藏の珍籍を歴覽して研究の歩を進め、有らゆる古今謡曲の同異を比較甄別し、之を彙類して解題を附したるもの即ち本書なり。

一本書は氏が數年前の編纂に係る。然れども氏は尙ほ以て足れりとせず、完璧を期せ

んが爲め、時々之を増補訂正せられたりき。之を未定稿のまゝ出版せんは氏の本意にあらざらんも、謡曲曲目の研究にして本書の如き博洽にして精確なるもの未だ曾て之れ有らず、未定稿といふと雖も、其學界に裨益を與へんこと鮮少ならざるべし。是れ故人の遺著として出版する所以なり。

一本書各曲解題の末に記入せる標號は、各流現行の曲は其流名を記し、廢曲のものは其出所の書目を擧げたるものなり。其標號左の如し。

- (觀) 觀世流
- (寶) 寶生流
- (春) 金春流
- (剛) 金剛流
- (喜) 喜多流
- (五) 五流共通
- (光悅) 光悅本

- (明曆外) 明曆本外百番
- (天) 天和本
- (貞) 貞享本
- (元) 元祿本
- (元祿外) 元祿本外百番及外別組三十番
- (正) 正徳本
- (明和) 明和改正本
- (明和外) 明和改正本外組
- (元寫) 元文二年松岡友素寫本
- (古寫) 古寫本
- (評) 謡曲評釋(大和田建樹著)
- (叢) 謡曲叢書(芳賀矢一佐々木信綱校訂)
- (新) 新謡曲百番(佐々木信綱校)

一本書の第一附録「觀世流謡本出版年譜」は氏の經營創刊せられたる雜誌「謡曲界」に大正四年一月號より連載せられたるものなり。該年譜は氏が自家の藏本を主とし、更に安田善之助、徳永重康、横山柚人、宮井安吉、東邨守節、稻田政吉、六合新三郎等諸氏の藏書をも参考し編纂せられたるものなり。

大正八年十一月

安藤東庵識

古今謡曲解題目次

本文

| | | |
|----|-------|----|
| 第一 | 古史及古人 | 一 |
| 二 | 古史 | 一 |
| 三 | 古人 | 七 |
| 第二 | 高僧聖賢 | 三三 |
| 第三 | 歌人及俊秀 | 四二 |
| 一 | 小野小町 | 四二 |
| 二 | 在原業平 | 五〇 |
| 三 | 檜垣の女 | 五一 |
| 四 | 紀貫之 | 五三 |
| 五 | 紫式部 | 五三 |
| 六 | 和泉式部 | 五六 |
| 七 | 式子内親王 | 六〇 |
| 八 | 小侍従 | 六二 |
| 九 | 西行法師 | 六三 |
| 十 | 樂舞 | 六九 |
| 十一 | 雜 | 七四 |
| 第四 | 武人 | 八六 |

| | | |
|----|----------|-----|
| 一 | 源頼光及其郎黨 | 八六 |
| 二 | 前九年役 | 八九 |
| 三 | 平治の亂 | 九一 |
| 四 | 奥界ヶ島の流人 | 九三 |
| 五 | 源頼政及其郎黨 | 九五 |
| 六 | 木曾義仲及其一黨 | 九九 |
| 七 | 平家一門及郎黨 | 一〇四 |
| 八 | 源行家及源範頼 | 一三五 |
| 九 | 源義經及其與黨 | 一二六 |
| 十 | 源頼朝及其一黨 | 一五二 |
| 十一 | 文覺 | 一六三 |
| 十二 | 承久亂 | 一六六 |
| 十三 | 最明寺時頼 | 一六九 |
| 十四 | 元弘の變 | 一七二 |
| 十五 | 楠木氏 | 一七五 |
| 十六 | 豊臣氏 | 一八〇 |
| 十七 | 雜(日本) | 一八三 |
| 十八 | 雜(支那) | 一九六 |
| 第五 | 仇討 | 二〇〇 |

第六 世話巷説

一 曾我兄弟 二〇〇

二 雜 二〇九

第七 美人

一 松風村雨 二九四

二 源氏物語の女 二九七

三 在五中將と契りし女 三〇八

四 小督局 三一〇

五 祇王と佛 三一三

六 雜 三一三

第八 社寺神佛

一 山城 三二一

二 大和 三二一

三 攝津 三三三

四 近江 三三九

五 伊勢 三四四

六 雜 三五〇

第九 天仙鬼畜

一 天人 三九七

二 仙人 三九七

三 龍神 四〇一

四 天狗 四〇九

五 狸々 四一六

六 鬼神 四一九

七 雜 四二五

六 紀伊 三五四

七 淡路 三五七

八 讃岐 三五八

九 丹後 三五八

十 播磨 三六〇

十一 出雲 三六二

十二 筑紫 三六三

十三 尾張 三六五

十四 信濃 三七四

十五 甲斐 三七六

十六 駿河 三七八

十七 相模 三七九

十八 武藏 三八〇

十九 常陸 三八二

二十 奥州 三八三

二十一 雜 三八五

第十 精魂

一 植物 四三九

二 動物 四三五

三 雜 四六三

第十一 雜

一 名勝 四六七

二 祝言 四七二

三 明治大正時事 四七七

別記

謠ひもの 四八一

異名と思はるゝ曲名 五〇七

記録に存する不明の曲 五二四

誤字又は誤音と思はるゝ曲名 五三八

一行草書體の類似によりて誤り傳へられたり
りと思ゆるもの 五三八

二 假字の誤讀によつて誤り傳へたりと思ゆるもの 五五〇

三 聴取の誤と思はるゝもの 五五五

四 誤寫と思はるゝもの 五五八

脱字と思はるゝ曲名

一 二名を一にしたりと思はるゝ曲名 五七〇

二 謠曲以外の名の混入と思はるゝもの 五七三

三 雜 五七五

附録

觀世流謠本出版年譜

猿樂文庫藏書目錄

索引

ある時は雲に聳ゆる高山を

こゝろの影と見し身なりけり

丸岡 桂

古今謡曲解題

丸岡 桂 著



第一 古史及古人

古史

大蛇・蛇・蛇

前シテ手名槌。前ツレ足名槌。後シテ大蛇。子稻田姫。ワキ素盞鳴尊。ロキツレ從者。所出雲簸の川上。

素盞鳴尊出雲の國にて手名槌が娘稻田姫の大蛇にとられんことを歎けるに逢ひ、姫を得んことを約し、簸の川上に至りて、十柄の劍を以て彼の大蛇を退治し給ふ。(貞、元

第一 古史及古人

寫、實、剛、喜) クセ 八九五

【備考】能本作者註文「及二百十番諸目錄」に觀世小次郎の作とせり。又「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿七日、春日社の祭禮に觀世太夫が出雲十柄を演じたりと見え、「嬉遊笑覽」の註に寛正の頃興行ありし出雲十柄は外百番中の大蛇の別名なるべしと見ゆ。或は古く出雲十柄とも云ひしものか。されども又次項の御崎の一名かとも思はるれば未だ斷じ難し。別に名寄に十柄とあるは出雲十柄の略名なること他曲の例によりて疑無し。

【御崎】 三崎 十羅刹

シテ素盞鳴尊の姫。ツレ素盞鳴尊。トモ從者。ツレ天竺月支國ひこはね天皇(鬼神)。ツキ官人。所出雲そがの里。時二月。

素盞鳴尊、天竺月支國より日本を襲ひ來るべき由を聞き、日本の神々を出雲に勸請し給ふ。茲に曾て尊が龍王の姫宮と契り給ひし時生れ給ひし姫宮あり。父尊が守護にと

て與へ給ひし十柄の劍を持ちて尋ね來り給ふ。折から異國の船八萬艘億兆の兵を載せて攻め來りたれば、姫即ち十羅刹女と現じ、又白鳥と身を變じて、父尊に力を合せ遂に敵を退治し給ふ。(貞、元寫)

【備考】蔭涼軒日録に見えたる出雲十柄とは此曲又は前項大蛇の古名なるべし。又名寄に大國退治とあるは或は此曲を指す後世の假稱か。

【叢雲】

前シテ足名槌。前ツレ手名槌。後シテ大蛇。子稻田姫。ツキ素盞鳴尊。所出雲簸の川上。

素盞鳴尊簸の川上に大蛇を退治したることを作る。(明治本)

【備考】高木半作、觀世清孝節附の新作なり。

【玉井】

前シテ豊玉姫。前ツレ玉依姫。後シテ海神。後ツレ天女。ワキ彦火々出見尊。所
龍宮。

彦火々出見尊、兄火闌降尊の釣針を魚に取られ、之を取り返さんとして龍宮に至り、龍
女豊玉姫と契り給ふ。(觀、寶、剛、喜)

【備考】能本作者註文「及二百十番謠目錄」に觀世小次郎の作なりと見ゆ。

【鶉^ウ羽^ハ】 鶉鶉羽

シテ龍女豊玉姫の靈。前ツレ龍女玉依姫の靈。ワキ當今臣下。所日向鶉戸の岩
屋。時秋。

豊玉姫の靈、干珠滿珠の功德を語り、又奇特を示す。(光悅以下各種謠本)

【備考】世子六十以後申樂談儀「に世阿彌の作と見え、曲名「能作書」「歌舞髓腦記」等に散
見す。又「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月七日(勸進猿樂二日目)、「親元日記」に寛
正六年二月廿八日、共に觀世が演じたること見ゆ。かく古記にも見え、徳川初期の各

種謠本にも百番の中に加へられたる曲なるが、元祿以後謠本より之を省かれたり。「翁
草」によれば元祿十四年江戸幕府の殿中にて淺野長矩が吉良義央を傷けし當日、勅使
接待能の脇能なりしたため、不吉の例として廢止せられたるものゝ如し。

【異國退治^{たいじ}】

前シテ志賀明神の化身。後シテ龍神。ワキ官人。所筑前志賀の島。

神功皇后三韓征伐の首途に、志賀の島にて龍宮の干珠滿珠を授かり給ふ事を作る。
(元)

【備考】能本作者註文「に觀世彌次郎作。

【三^{さん}韓^{かん}】

シテ神功皇后。ツレ立衆。ツレ武内宿禰。ツレ新羅王。ツレ新羅の臣。所韓。

神功皇后の三韓征伐を作れり。(明治本)

備考高木半作文、觀世清康節附の新作なり。

八 **鈴落**

シテ住吉仲の皇子。ツレ黒姫。ワキ皇子瑞齒別。所攝津難波。時秋。

住吉仲の皇子、兄履中帝の命をうけて其妃に立てらるべかりし黒姫のもとに至りしが、姫の美しさに心動き、兄帝なりと偽りて一夜の契をこめ、持ちたる鈴を姫の鬘に落して歸る。後日此鈴によりて事現れ、瑞齒別皇子に攻められて、終に誅せらる。(正)

九 **養老** 別名養老瀧

前シテ樵夫の翁。前ツレ樵夫の子。後シテ山神。ワキ雄略帝勅使。所美濃本集。

勅使養老の瀧に至り、孝子と其父とに逢ひ、奇特なる瀧の物語を聞く。こゝに又山神現れて御代を祝ふ。(五) **薬水**

備考世子六十以後申樂談儀「能本作者註文」二百十番謡目録に世阿彌の作なる由見

ゆ。「能作書」にも此名見えたり。又「紆河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日(勸進猿樂三日目)音阿彌が勤めたること見え、「親元日記」に寛正六年二月廿八日觀世が演じたること見ゆ。

一〇 **涿鹿**

シテ貨狄。ツレ黄帝。ツレ臣下。ワキ蚩尤。所唐土。

黄帝貨狄が作りし舟に乗つて烏江を渡り、涿鹿の野に蚩尤を亡す。(貞、元寫)

二 古人

一一 **難波** 別名難波梅

シテ王仁の靈。前ツレ梅の精(男)、後ツレ木華開耶姫の靈。ワキ當今臣下。所攝津難波。時正月。

朝臣難波に至りたるに、王仁の靈現れ、難波の梅の古事を説き、仁徳天皇の昔語をな

し、又木華開耶姫の神靈と共に御代を祝ひて舞樂を奏す。(五)

【備考】「二水記」に永正十五年正月廿六日難波梅を演じたる事見え、「言繼卿記」「親俊日記」等に天文中屢々演能の事見ゆ。「言繼卿記」には難波とも難波梅とも記せり。「能本作者註文」に世阿彌の作。

【吳服】 吳機・吳羽

シテ吳織の靈。ツレ穴織の靈。ワキ當今臣下。所攝津吳服の里。時春。

朝臣吳服の里に吳織穴織の幽靈に逢ひ、奇特を見る。(五)

【備考】言繼卿記「弘治二年二月十二日の能番組に吳機と記せり。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿彌作。

【花筐】 花形見

シテ照日の前。ツレ侍女。ワキ供奉官人。ツレ同臣下。ツレ男大迹皇子の使者。

子繼體天皇、所越前。後大和。時九月。

繼體天皇未だ皇子にて越前にましまし頃、契り給ひし照日の前といふ女、御形見の花籠を持ち御跡を追ひて都に上り、紅葉の御幸の道にて逢ひ奉り、再び召使はるゝ事を作れり。(觀、寶、剛、喜)【花筐】花筐前【花筐切】一に安閑留、又、女御留、又

照日宮(九)

【備考】世子六十以後申樂談儀「歌舞髓腦記」「五音三曲集」等に散見す。「能本作者註文」には世阿彌の作と見え、「二百十番謡目録」には觀阿彌の作と見ゆ。中の文を變へたる謠花筐前、及終の文を變へたる謠安閑留(一に女御留、又花筐切)あり。

【鳥羽】

シテ王辰爾。ワキ敏達天皇臣下。所大和。

敏達天皇の時、唐(史には高麗)より鳥羽に表文を書きて上り、日本の智慧を計らんとしたるに、王辰爾之を蒸して帛に摺り悉く讀み得たる古事。(評)

備考 大和田氏著「謠曲評釋」に出でたる外に見ず。創作の時代不明。

一五 守屋 別名 守屋太子・守屋逆臣

シテ春日明神の神靈。ツレ秦河勝。子上宮太子。ワキ物部守屋。ツレ勝海の連。 狂言太子従者。狂言守屋従者。所前大和。後河内。時秋。

上宮太子春日明神の神護により危き命を助かり、やがて物部守屋を亡ぼし給ふ。(貞、元寫)

備考 「世子六十以後申樂談儀」に「守屋の能に守屋の首を斬ると云ふ所、こゝをば節にて首を斬るべき所なり。井阿彌生れ替りても知るまじきなり。守屋と論議に云ひて、あとしへし、ひくら子細に云々て、首を斬ると云ひて、さつとして入るべき所なり」など見ゆ。「能本作者註文」に作者不明とあり。類曲に信貴山あれど趣を異にす。

一六 信貴山 志宜山

シテ毘沙門天王の化現。ツレ神靈。子上宮太子。ワキ太子臣下。ツレ同。所前 大和信貴山、後河内。時秋。

上宮太子物部守屋を亡し給ひし時、毘沙門天王の化現力を添へたることを作る。(貞、元寫)

備考 類曲守屋あれど趣を異にせり。

一七 鞠の勳

シテ葛城尊。ツレ蹴鞠衆。ツレ入鹿。ツレ鎌子。ツレ石川麻呂。

葛城尊入鹿を誅し給ふ事。(明治本)

備考 高木半作文、觀世清孝節附の新作なり。

一八 五節

シテ天女。子清見原の皇子。ワキ宿の主。所吉野國栖。時中秋。

清見原の皇子(大海人の皇子)、大友の皇子に襲はれ吉野に遁れ給ひたるが、折ふし中秋名月の夜、天女現れて五節の舞を奏し皇子を慰め奉る。(正)
備考名寄に五郎とあるは此曲名の誤なり。

一九〇 〔國 栖〕 國標

シテ藏王權現。(前は化身)前ツレ山神の化身。後ツレ天女。子清見原皇子。ワキ供奉臣下。ツレ同。狂言追手の兵。所大和吉野。時春。

大海人の皇子、大友の皇子に襲はれて吉野に遁れ給ひし時、山神の化身なる漁人夫婦の家に息ひ給ひ、危き命を助かり給ふ。(五)

備考「禪鳳習道目錄」に曲名見ゆ。「二百十番謡目錄」に世阿彌作。

二〇〇 〔武藏塚〕

シテ小野の美沙子の靈鬼。ワキ梅園の三位。所大和若草山。

昔小野美沙子武藏の國司なりしが、後奈良の都に歸りて身罷りぬ。深く武藏野を慕ふ心に、骸を武藏に埋めよと云ひ遺したれど、若草山のほとりに埋めて其所を武藏野といひ、其塚を武藏塚といへり。此曲は梅園三位此塚を弔ひて美沙子の靈鬼に逢ふことを作れり。(正)

備考名寄に梅園、武藏野といへる曲名は共に此曲の一名か。

二〇一 〔橘〕

シテ橘諸兄の靈。ワキ官人。

官人橘諸兄の舊蹟を尋ねて其神靈に逢ふ。(明治石版刷單行本)

備考梅若實が其祖先の爲に作らしめしもの。梅若舞臺にて屢能に演ず。

二〇二 〔田 村〕

シテ坂上田村麿の靈。ワキ旅僧。所山城。清水寺。時春。

清水寺の田村堂に祭られたる坂上田村麿の靈現れ、旅僧に清水寺の縁起及觀音の功德を語り、又東夷征伐の際鈴鹿山に千方を亡ぼしたる戦功を語る。(五)

【備考】「五音三曲集」に謠の一節出づ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日觀世又三郎が演能の事見え、又「親元日記」に文明十五年三月十二日演能の事見ゆ。田村麿の鈴鹿の鬼神退治の事を作れるもの別に巖頭あり。

二三 融とける

シテ源融の靈。ワキ旅僧。所京六條河原院の跡。時八月。

昔、融左大臣、陸奥千賀の浦の鹽竈の眺望を都に移さんとて、河原院に其景を模し、毎日難波津より汐を運ばしめてこゝに鹽を焼かせたりしが、其後志を繼ぐ者無くして荒るゝに任せたり。此曲は旅僧河原院の古跡にて大臣の亡靈に逢ふことを作れり。(五) 【備考】毛端私珍抄「習道目錄」等に曲名見ゆ。「能本作者註文」に世阿彌の作としたれど

如何あらん。「二百十番謠目錄」には觀阿彌の作とあり。「世子六十以後申樂談儀」に轉飼の事を記したる序に「彼の鬼も、觀阿融のものとての能の後の鬼を移す也。彼の鬼のむきは、昔のむまの四郎の鬼也。觀阿もかれを學ぶと申されけるなり」とあり。此融のおとゞの能は今の融と異なること云ふまでも無く、觀阿彌の作りたりといふはこれなるべし。又吉田博士の「能本作者註文」の頭註に「融は鹽釜ともいへり」とある。これは「拾玉得花」の鹽竈の原註によられたるものなるべきも俄に斷じ難し。鹽竈參照。

二四 雷かみなり電でん 來殿(現實生流)

シテ菅原道眞の靈(後に雷電)。ワキ法性坊律師僧正。所前近江比叡山。後京宮中。時秋。

菅丞相の靈雷電となりて内裏に飛び入り、恨ある雲客を蹴殺さんとしたるも、法性坊僧正に祈られて果さざりし事を作る。(觀、實、剛、喜) 【備考】類曲に菅丞相あり。

二五 菅丞相

シテ菅丞相の靈。ワキ法性坊僧正。所前比叡山、後賀茂川のほとり。

菅丞相の靈恨をなして帝御惱あり。祈禱の爲法性坊僧正を召されたるに、丞相の靈妨をなさんとしたるが果さず、終に恨を捨てたることを作れり。(元)

備考類曲雷電とは前段の事柄大方似通ひたり。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこと見ゆ。「能本作者註文」には宮増作とせり。

二六 徑山寺 金山寺

シテ菅丞相の靈。ツレ老松の精靈。ワキ徑山寺の僧無準。所唐土。時初春。

徑山寺無準の夢中に菅丞相の靈現れ、參禪の望を遂げたりと語ることを前段とし、始皇帝に爵を行はれたる老松の精靈丞相に従ひ來り、舞を奏することを後段とせり。(元寫) クセ

二七 鐘引 鐘曳・鐘挽別園城寺・引鐘(引金)

シテ龍神。ワキ園城寺住僧。ツレ伴僧。狂言能力。所近江園城寺(三井寺)

田原藤太秀郷が龍神の敵なる蜈蚣を退治したる報恩に龍宮より梵鐘を贈り來る。秀郷之を園城寺に寄進し、龍神をして鐘樓に引き揚げしむ。(明曆外、評)

備考「貞享番外百番本」に組み入れられたる引鐘はこれと全く同曲なれども、前に撞鐘を鑄させよとの敕使下る一條ありて、ワキを敕使とし、此曲にてワキなる住僧をワキツレとし、狂言を倭藤太の使者としたる相違あり。孰れが原作なるか判じ難し。「言繼卿記」の弘治元年正月九日の條に他の謠本と共に引鐘の謠本を借りたる事見ゆ。當時此謠の行はれしなるべし。

二八 百足

前シテ龍神の化女。後シテ蜈蚣の精魂。ワキ依藤太秀郷。所近江勢田。

秀郷靈夢の告に隨ひ龍神の頼を受けて三上ヶ嶽に年經たる蜈蚣を退治す。(正)
備考名寄に秀郷とあるは此假名にや。

二九
【紅葉】 楓別名高倉院

シテ院の上童。ツレ侍女。ワキ清閑寺住僧。所京。時秋。

高倉院崩御の御一周忌を清閑寺の御陵に營まれたる時、院の上童御在世の聖徳を物語り御跡を弔ふことを作れり。院、紅葉を愛し給ひし一條の物語によりてかく名づく。(正)

備考「和謠分國記」にかいてとあるは楓の讀み誤りなるべし。

三〇
【武王】

シテ周の武王。ツレ大師儀。ツレ少師強。ワキ大公望。ワキツレ周公旦。狂言官

人。所唐土。

武王、般の紂王を滅したる時、紂の師戰意無く皆武王に黨し、戰はずして勝ち得たることを作る。(元寫)フセ八九三

備考「時慶卿記」慶長九年八月十四日の條に、豊國臨時祭に四座の能ありて一番づ、新作を演じたる時、金春は橋を、觀世は武王を勤めたる由見ゆ。

三一
【邯鄲】 別名邯鄲枕・盧生

シテ蜀の民盧生。子夢中の舞人。ワキ夢中の敕使。ワキツレ夢中の大臣。狂言
邯鄲の宿の主。

盧生といへる少年、楚國の羊飛山に大智識を訪ひ教を受けんとする途次、邯鄲の里に立ち寄り、不可思議の枕に眠りて粟飯一炊の間に王位に昇りたる五十年の夢を見、此に名利唯一夢の如きを悟る。(五三)

備考「歌舞隨腦記」「一休題頌」「禪鳳習道目錄」「親俊日記」等に曲名見え、「紕河原勸進猿

樂記」に寛正五年四月四日(同勸進猿樂初日)音阿彌が演じたること、「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日觀世又三郎等が演じたること、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日(粟田口勸進猿樂三日目)に演じたること見ゆ。又「能本作者註文」には作者不明、「二百十番謡目録」には世阿彌の作とあり。

三三 松竹(乙)

シテ翁。ツレ翁の連。ワキ漢劉季皇帝。ワキツレ臣下。狂言官人。所唐土。

劉季皇帝、沛の池に車をとどめ、父老子弟に致酒したる時、老翁來りて代を與ふ。松と竹とを詞の綾とす。(新)

備考「明和本」の獨吟に入れられたる松竹(丁)は此曲の一節に似たれども文相違せり。

三三 鍾馗

シテ鍾馗の靈。ワキ終南山の籠の者。所唐土。

終南山の者都に上る途次、山中にて鍾馗の靈に逢ふ。(五)

備考「五音曲條々」「五音次第」「五音三曲集」に謡の一節を引く。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に金春禪竹の作とあり。又「能本作者註文」に別に世阿彌の作の曲名中にも挙げたれども、此には鍾馗と書きて「鍾」字を誤りたり。これにつきて吉田博士は其頭註に「鍾馗の馗字を削るべし」と記し、又小引に「世子の作は鍾引にして鍾馗に非ず、是は文字の誤に出づ」とせられたるが、こは單に文字の誤に止り、必ずしも鍾引の誤とは斷じ難かるべし。又「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十日の薪の猿樂に金春太夫が演じたりと見ゆる鍾馗大臣は此の曲の一名なるべし。或は皇帝の一名とも見らるれども、皇帝には別に明王鏡の古名あれば然らざるべし。

三四 皇帝 別名明王鏡・玄宗・御惱楊貴妃

シテ鍾馗の靈。ツレ楊貴妃。ツレ鬼神。ワキ玄宗皇帝。ハキツレ大臣。所唐土病

鍾馗の靈。玄宗皇帝に奏して明王鏡に病鬼の影を映さしめ、之を退治して楊貴妃の。

を鎮む。(元寫、明和、觀、寶、剛、喜)

備考 能本作者註文「及二百十番謠目錄」に觀世小次郎の作と見ゆ。

第二 高僧聖賢

三五 〔行基〕

シテ行基菩薩の靈。ツレ天女。子赤坂の主の息。ワキ津の國赤坂の者。所和泉家原寺。時春。

赤坂の者河某、主の若君に従ひて家原(えは)寺の文珠を拜し、開山行基菩薩の尊靈に逢ふ。(元寫)

三六 〔良辨〕 郎辨

シテ良辨の母(物狂)。ツレ愛宕の者。ワキ良辨。狂言能力。所大和奈良。奈良金鐘山の開山良辨上人はもと近江の人なりしが、幼き時鶯にとられ、春日に近き

深山に落されたるを、義淵といふ人救ひて育て上げたるなり。良辨漸く高僧の聞え高く、或時奈良に説教したるに、聽衆の中に年久しく良辨を尋ねて諸國を廻り居たる母の物狂ありて、良辨の身の由來を聞き、始めて子なるを知りて互に名のり合ふ。(元寫)

備考 傍訓は「元享釋書」に據る。俗訓「りやうべん」。

三七 〔三輪童子〕 別名 行賀

シテ三輪の神(童子)。ワキ行賀。所大和三輪。時夏。

行賀上人曾て南都の山階寺に在りし時、惡瘡の爲死せんとせる童子を救はんため左の耳を與へしが、後年三輪の山陰に世を厭へる處に奇特なる童子來り、昔耳を賜はりたる童子なるが今は解脱の臺に至りたりとて彼の耳を返し、又神樂を奏して上人を慰ましむ。(元寫、考)

三八 **伊呂波**

シテ空海の靈。ワキ菅好治。ワキツレ同伴者。所京都、東寺。時三月下旬。菅の好治、東寺にて空海の靈に逢ふ。伊呂波歌を文の綾とせるにより此名あり。(正、元寫)

三九 **空也** **別名空也上人**

シテ石見の國高津の何某。ツレその弟。ワキ空也上人。狂言上人從若。所長門赤間關。時秋。

仇を討たんと志して盲目の乞食を装ひ居たる高津某、此世にて假なる敵を助け長き世に敵を打つべしと云ふ空也上人の法話を聞き、又其敵人が上人の弟子となり居て既に身罷りたるを知り、此に悟を開きて後仇を思ひ止る。(元、元寫)

備考 世子六十以後申樂談儀などに此曲名見ゆ。同本の吉田博士の註に「こうや敷」と

したるは誤なるべし。又「和謠分國記」に「空屋」の名を挙げたるは此曲名の當字なるべし。

四〇 **素盞櫻** **素拜櫻** **別名素** (素拜・楚佐)・そま・そま櫻

シテ上界天女の化現。ワキ比叡山の性空。所播州素盞鳴山。時春。

性空佛像を刻まんとて御衣木たるべき樹を尋ねるたるに、播州素盞鳴山に瑞雲のたなびけるあり。行きて見るに美しく咲き亂れたる櫻樹ありて、天女の化現天降り、此木を禮し、佛體を刻むべき木なりと教ゆ。(貞、元寫)

四一 **室住** **室澄**・室積

シテ普賢菩薩。ワキ書寫山性空上人。所周防室住。

性空上人靈夢によりて普賢菩薩を拜まんと周防に至り、親しく普賢の化現なる室住の長と物語る。(貞、元寫)

四二 自然居士

シテ自然居士。子少女。ワキ人商人。ワキツレ同。狂言里人。所前山城雲居寺、後近江大津の浦。

自然居士雲居寺にて説法の時、亡き両親を供養するため身を人商人に賣りて衣一裏に代へ、之を布施として諷誦を上げたる少女あり。居士諷誦文によりて其身を賣りたるを知り、説法を中止して其跡を追ひ、大津の浦に追ひ着きて衣を人商人に返し少女を救ひ歸る。(五)

備考「能作書」に「自然居士、花月、東岸居士、西岸居士などの遊狂」又「自然居士、花月、男ものぐるひ」又「自然居士、古今有り」と見ゆ。此曲終の段に大津の浦にて人商人と争ひ或は舞を舞ひ或は髻を磨りて戯れ狂ふことあり。故に遊狂と云へるなるべし。「古今有り」と云へるは其原作が遠く観阿彌以前のものなるを證すべく、「世子六十以後申樂談儀」に観阿彌作としたるは観阿彌が改竄補填したる謂なるべし。又曲舞に

自然物狂といへるがあれど、これは完曲傳はらず、男ものぐるひとあるは此自然物狂をさして云へるにや。「歌舞髓腦記」「禪鳳習道目錄」等にも曲名見ゆ、又「二百十番謠目錄」に観阿彌作としたるは觀世家所傳の古記に據りたるなるべく、「能本作者註文」に世阿彌作としたるは單に口碑に基きたるなるべし。但同本には「観阿の作と云説あり」と註せり。演能に就きては「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞御能、「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月七日(二日目)の能、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日(三日目)の能など見ゆ。

四三 華自然居士 花自然居士

シテ自然居士。ワキ下京邊の者。ワキツレ同行者。所京都、清水寺。時春。

自然居士花見の人に乞はれて清水寺の花下に亂舞をなし又鞆鼓を打つ。(正、元寫、新)

四四 聾入自然居士 墮入自然居士 北山(甲)

シテ自然居士。ツレ衣笠中納言の姫。ワキ衣笠中納言の臣。所京北山。時春。
 衣笠中納言の姫、雲居寺に自然居士の説法を聞きて戀となり、文を送れども返しの來らざるため之を悲みて病の床に臥し、終に空しくならんとす。家臣憂ひて最後の文を持ちて居士を訪ひ、病の様を語りて來らんことを求む。居士破れ衣を纏ひ垢づきたる面して來り、説法して姫が戀の妄執を去らしむ。(貞、元寫) **クセ**北山七八

備考「能本作者註文」に世阿彌の作としたれども「申樂談儀」に此名見えず。

【西岸居士】

シテ西岸居士。ワキ上京邊の者。所山城。時春。

西岸居士道行人に橋の勸をなし、行人の所望により或は舞ひ或は鞆鼓を打ち、狂言綺語を藉つて佛道を説く。(正)

備考「能作書」に「自然居士、花月、東岸居士、せいがんこじなどの遊狂」と見ゆ、古き曲なるべし。傍訓は此假名書に據りたり。

【東岸居士】

シテ東岸居士。ワキ遠國の者。所京都清水寺。時春。

東岸居士狂言綺語に事よせて清水寺の花下に佛道を説く。(觀、實、剛、喜)

備考「能作書」に此名見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に世阿彌の作とせり。

【融通鞍馬】

シテ多聞天王。ワキ良忍上人。所山城鞍馬。

多聞天、大原の良忍上人の庵を訪ひて上人を鞍馬に誘ひ、融通念佛の修行を賞し奇特を示す。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に世阿彌の作とあり。「和謠分國記」には曲名を單にゆづうとせり。又名寄に多聞といへるは或は此曲の一名か。

四八 **春日龍神** カサガリリウジン **別名明慧上人** メイウエシヤウジン

前シテ時風秀行。後シテ龍神。ワキ明慧上人。所大和春日。

明慧上人、入唐渡天の志あつて春日社に詣でたるに、明神奇特を現じて思ひ止まらしめ給ふ。(五)

備考「親元日記」に寛正六年三月九日觀世が明慧上人を演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。

四九 **堀兼の井** ホリカネノイ **別名堀兼?**

シテ關の清次の靈。ワキ解脱上人。所武藏野霞が關。時三月。

武藏野霞が關に關の清次といふ者あり。井を堀らんとして陰陽師に見せたるに、此所は地神の谷あるべければ、餘の所を堀るべしと云ひしが、清次之を聞かずして堀るに、堀れども堀れども水は出でざるのみか、終に地神の科によつて空しくなれり。解

脱上人武藏に下りて清次の亡靈に遭ひ、此物語を聞きて跡を弔ひ成佛せしむ。(元寫) 備考「いろは名寄」等に見えたる堀金は此略名の誤字なるべし。これによりて適々署名を堀兼と稱へしことを推するに足る。

五〇 **選擇集** センザクシュ

シテ源空。ツレ月の輪禪閣。ワキ禪閣家臣。後ツレ天女。所山城月輪。

月の輪禪閣、(藤原兼實)源空上人の勸化により佛門に歸依し、選擇念佛集を上人に所望し、上人を迎へて其説教を聽く所に、天女天降りて奇特を現す。(元祿寫本) 備考寫本は朱を加へたる觀世流の謠本なり。零本一冊、佛法僧、選擇集、淺草寺、箱崎物狂、鹽竈(乙)の五番を收む。「和謠分國記」に月の輪とある曲名は或は此一名にや。

五一 **上人流** シヤウジンナガシ **別名源空流・神崎** ゲンクウナガシ・カミザキ

前シテ遊女。ツレ遊女。ツレ源空上人。(假名、藤井元彦)後シテ遊女の靈。ワキ
土御門院の臣瀧口某。ワキツレ船人。所攝津神崎。

源空上人、土佐國へ流さるゝ途次、神崎に着きたるに、所の遊女棹さし來りて教を乞ふ。上人懇に説き聽かせたるに、彼の遊女現世を思ひすて死を急ぎてやがて、空しくなりしが、其亡靈再び上人に見え、佛果を得て歌舞の菩薩となり得たることを喜ぶ。(貞、元寫)

【備考】文安田樂能記に法然上人といふ田樂の曲名見えたるは或は此曲の原作にや。名寄に上人拂とあるは上人流の誤、雁崎とあるは神崎の誤なるべし。

五三 誕生寺

シテ源空上人の乳母の靈。ワキ黒谷の僧。所美作誕生寺。時春。

僧誕生寺に參りたるに、源空上人の乳母の靈現れ、寺の由來、上人の徳などを語る。(元寫)

五三 兼實 別名一枚起請(一枚起書)

前シテ源空上人。後シテ大勢至菩薩。ワキ九條兼實。所近江叡山黒谷。

九條兼實源空上人を訪ひて教を受け、乞ひて一枚起請を得、廿五菩薩の奇特に遭ふ。(元寫)クセ一枚起請二八四

五四 御菩薩 別名菩薩

前シテ寂然の化身。後シテ文殊菩薩。ワキ僧。

老齡既に傾き末期近づきたるを覺え、廿五菩薩を造立し道場をしつらひて、念佛三昧に身を委ぬ居たる僧、寂然の化身文殊菩薩の奇特を拜す。(正)

【備考】名寄に御芹とあるは此曲名を御井と書きたるものゝ誤傳なるべし。

五五 仲算

シテ春日の神靈。ツレ末社の神靈。ワキ松室仲算。ワキツレ從僧。所前山城木津川後京。時春。

仲算、南都北嶺の宗論の時、春日神靈の加護を受く。(貞、元寫)

五六いたじき【板敷山】 板鋪山

シテ親鸞上人。ツレ僧數名。ワキ山伏。シテツレ山伏、二名。所常陸板敷山。

親鸞上人稻田の草庵に在りし時、日每里に出で、法を説き、常に山路を往返し居たり。こゝに是を妨げんとする山伏ありて、常に道に要せんと待ち居たるも、上人法徳により悉く異なる道を通りたる爲相逢はず。山伏終に憤りて山中の庵室に押し寄せたるが、反つて上人の説法に屈服す。(元寫、觀)

【備考】近年刊行の觀世本にはワキの名「辨圓」、ワキツレの名「正陸」「覺海」とあり。元文寫本に此事無し。

五七とや【鳥屋野】

シテ伊夜彦の女神。ワキ僧。所越後鳥屋野。時初秋。

奥州の僧、善光寺に一夏を送りての歸るさ、鳥屋野に親鸞上人の舊跡を弔ひたるに、伊夜彦の女神現れ、上人の故事、八つ梅、三度栗、なてんの櫻、八葉の松、逆竹などの奇蹟を語り、兩部一體の奇特を示す。(元寫)

【備考】古寫本の朱註に「越後得月齋の作文觀世太夫周雪の章」とあり。又「隨一小謠繪抄」に「親鸞上人四百五十年忌に作られたる能なり。一向宗の門徒は覺え居べき謠なるべし。板本あり」とあり。

五八たつ【瀧の口】

シテ日蓮上人。ツレ四條三郎頼基。ツレ日朝。ツレ徒弟。ワキ本間六郎重蓮。ワキツレ武人。所相模龍の口。

日蓮上人龍の口に斬られんとしたる時、同經の功德にて太刀取の目くらみ、太刀段々に折れたる奇特により、鎌倉殿より死を免ぜらる。(元寫)

備考類曲星降梅あり。

五九 はしくだりうめ **【星降梅】** はしくだり **別名星下**

シテ日蓮上人。ツレ日朗。ワキ平野頼綱。ツキツレ郎等。所相模龍の口。時文永八年九月十三日。

日蓮上人龍の口に斬られんとしたる時、時は九月なるに庭上の梅花に衆星降る奇特ありて、太刀取の太刀段々に折る。時宗此奇特に感じて死を免ず。(元寫)

備考類曲龍の口あり。

六〇 うづ **【鵜飼】** うづ

シテ鵜使の靈。ワキ日蓮上人。ツキツレ從僧。所甲斐石和川。時夏。

日蓮上人、石和川にて鵜使の漁夫の靈に逢ひ、之を成佛せしむ。(五)

備考 世子六十以後申樂談儀に「鵜飼、柏崎などは、久なみの左衛門五郎が作なり。さりながらいづれも悪きを除き、善き事を入れられければ、皆世子(世阿彌)の作なるべし」と見ゆ。「能本作者註文」には世阿彌の作とし、「二百十番謡目錄」には江波左衛門の作とせり。「歌舞髓腦記」には此曲出づ。能は「紉河原勸進猿樂記」に寛正五年四月四日(初日)の勸進能、「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿七日春日社祭禮の能、共に音阿彌が演ぜしこと見ゆ。

六一 じやうざうき **【淨藏貴所】** しよ **別名臥塚** ふしづか

シテ淨藏貴所の靈。ワキ眞言の客僧。所山城八坂。

客僧先師淨藏貴所の五十年忌に、八坂のほとりなる先師の古蹟青塚を訪ひ、報謝の廻向をなしたるが、こゝに淨藏貴所の靈現れ臥塚の來歴などを語らふ。(正、元寫)

六二 **留春**

シテ沙門留春。ワキ東山の某の律師。所山城東山。時春。

風流沙門留春、東山の花盛なる中に麴を摺り、鞆鼓を打ちて舞ふ。(新)

六三 **平太郎**

シテ善信上人(後は其幻影)。ワキ平太郎。所常陸那珂。紀伊熊野。

常陸大部の里の平太郎といふ者、熊野に來らんとするに當り善信上人の教を受けたる功德により、熊野權現の奇特を拜す。(元寫)

六四 **山住**

シテ山住の隱者。ワキ旅僧。所常陸筑波山。時秋。

旅僧筑波山に分け入りて念佛修行の隱遁者の庵に音づれたるに、適々修行者死したれば、夜もすがら其跡を弔ふ。夜半かの亡靈現れ、其弔を喜び、隱岐の國に行かばわが名を人の知るべし、泊の磯の者なりとて消え失す。(正)

六五 **大般若**

大槃若 **別名** 三藏・三藏法師

シテ眞蛇大王(前は化身)。前ツレ眞蛇大王化身の從。後ツレ天女二人。ワキ運岸寺(一本靈岸寺)。住侶三藏法師(玄辨)。所渡天の途、流沙川。

大唐運岸寺の三藏法師、大般若經を天竺より傳へんとして渡天せんとする途次、流沙川に至りたるに、此川に住む眞蛇大王の化身現れ、汝前生より渡天を志し此川を渡らんとして吾に妨げられ命を捨つる事七度なり、其心殊勝なれば此度は渡すべしとて、般若の初軸を與へ、又様々の奇特を示して彼岸に渡らしむ。(明曆外、元祿外、古寫)

六七

備考「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞の能に三藏法師のありしこと見ゆ。「能本作者註文」に作者不明として大般若の名を擧ぐ。

六六 **【布袋】**

シテ布袋和尚の靈。ワキ明州の者。所唐土。時春。

布袋和尚寂滅の翌年、明州の者何某、巖林寺に其遺跡を訪ひ、和尚の尊靈に逢ふ。(元寫)

六七 **【法華會】** 法花會

シテ釋迦如來。ツレ普賢菩薩。ツレ文殊。ワキ慧觀和尚。所唐土天台山。

慧觀和尚佛法の奥儀を極めたる徳により釋尊より親しく佛在世の昔語を聞き、又法華會を目のあたりに見る奇特に逢ふ。(元寫)

六八 **【祚國】** 佐國・作國

シテ祚國の靈。ワキ旅僧。所唐土花山。時春。

旅僧唐土明州の津に渡り、花山にて漢の祚國の靈に逢ふ。(貞、元寫)

六九 **【堯舜】** 別名重華(重花)

シテ重華(舜)。ツレ堯。ワキ勅使。狂言官人。

重華(舜)親に孝にして徳高き故により堯に選ばれて帝位に即く。(正)

七〇 **【許由】** 別名巢父

シテ許由。ツレ巢父。ワキ堯の臣下。狂言里人。所唐土箕山。時秋。

堯王の臣下箕山に賢人許由を訪ひ、天下を譲るべき綸旨を傳へたるが、許由肯せず、反て身穢れたりとして潁川の流に耳を洗ふ。ここに又巢父といふ賢人あり。牛に水を飼はんとて潁川に來り、許由の耳の穢によりて水の濁れるを見、我が牛には飼ひ難しと又牛を引きて歸る。(新)

七二 虎石

シテ聖人。ワキ從僧。所都押小路のほとり。時秋。

聖人の病重くして既に終と見えたる時、庭前の虎石涕哭の聲を洩し、其遷化と共に虚空に花降り音楽聞えて菩薩聖衆來迎したることを作れり。(元寫)

備考元文寫本に「こせき」と傍訓せり。松尾氏名寄に虎が石となせるは誤なり。

第三 歌人及俊秀

一 小野小町

七三 富士見小町

シテ小野小町。ツレ從者(男)數名。ワキ淺間神職。所駿河富士裾野。時秋。

出羽の郡司小野良實の女小町、歌の譽高けれども未だ富士山を見ず。從者を從へて富

士に到る。淺間の神職、男にても水無月ならでは禪定し難きに女人の入るは憚ありと答む。小町古歌を引きて理を説き歌を詠じ舞を奏で、神慮を清しむ。(元寫)

備考名寄に富士詣とあるは或は此一名なるべく、藤見小町又藤小町とあるは或は此曲名の誤字なるべし。

七三 草子洗小町 草子洗小町 草子洗(冊子洗・双子洗)

シテ小野小町。ツレ紀貫之。ツレ歌人數名。子帝。ワキ大伴黒主。狂言黒主從者。所京。時四月半。

清涼殿の御歌合に、黒主、小町に勝たんとて、前夜其私宅に忍び入り、小町が明日の歌を詠吟するを盗み聞きて萬葉の草紙に書き入れ、當日小町の歌は古歌なりと訴ふ。

小町悲みて其草紙を洗ひ、入筆の文字を洗ひ落して冤を雪ぐ。(觀、實、剛)

備考能本作者註文には世阿彌の作とし、「二百十番謡目錄」には觀阿彌の作とせり。「明和改正謡本」には著しく文を改めたり。又名寄に双紙源氏、晒源氏とあるは共

に此曲名の誤なり。

七四 雲林院小町

シテ小野小町。ツレ侍女。ワキ文屋康秀。トモ從者。所山城雲林院。時秋。
小町、父良實に後れて雲林院に詫しき月日を送れる頃、文屋康秀一夜密に訪ひたる事
を作る。(元寫)

七五 高安小町

シテ小野小町。ワキ瀧口何某。狂言敕使。所河内高安。時秋。
小町禁中の月見の御歌會に、帝の御歌を貶したりとの讒を蒙り、河内高安の里に籠者
せしめられたるが、高安に下る途にて遙に石清水八幡を伏拜みたる神威にて、程もな
く赦免せらる。中に業平河内通の事を物語る一條の謠あり。(評、元寫)
備考 室町殿中諸事書留の應永九年六月十六日の項に高安小町の曲名見ゆ。又名寄に

高原小町とあるは此曲名の誤傳なるべし。

七六 鸚鵡小町

シテ小野小町。ワキ敕使。所近江關寺邊。時春。
老後關寺邊にさすらひ居たる小町、内裏より御歌を賜ひ、鸚鵡返しの返歌を詠む。(觀
剛、實、喜)

七七 關寺小町

シテ小野小町。子稚兒。ワキ關寺の僧。ツレ伴僧。所近江關寺。時七月日。
小町、百年の姫となり、關寺邊に住みたるも誰も小町の果なるを知る者無し。一年七
夕星祭の夕、關寺の僧稚兒を連れて其庵を訪ひ、歌語を聞き、やがて伴ひ行きて共に
星を祭る。小町昔を忍びて舞を舞ふ。(五)

備考 能本作者註文「及二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。

七八 **卒都婆小町**

卒都婆小町こまち・小町卒都婆こまちととば・小町物狂こまちものぐるひ

シテ小野小町。ワキ高野山の僧。ツキツレ伴僧。所山城。時秋。

小町、老ひ衰へて路頭に物を乞ふ身となり、洛外をさまよひ、行き疲れて倒れたる卒都婆に息ふ。折ふし來かゝりし高野の僧、其卒都婆に息へるを見て驚き、教化せんとしたるも反て小町の爲に云ひ詰めらる。かゝる間に小町、四位の少將の死靈に憑かれて狂亂の態となりしが、暫くにして狂氣覺め、此に初めて悟道に入る。(觀)

備考 世子六十以後申樂談儀に「小町、昔は長き能なり。「過ぎゆく人は誰やらん」と云ひて、猶々謠ひしなり。後は「其あたりに玉津島の御座あり」とて幣帛を捧げければ、御前驅となりて出現ある體なり。是を善くせしとて日吉のからす太夫と云はれしなり。當世之を略す」と見ゆ。今の卒都婆小町には「こぎ行く人は誰やらん」と云ひて直に詞となり居れり。同じ「申樂談儀」に觀阿彌の作と見えたるは、古くより行はれし曲の長かりしを觀阿彌が約めたるなるべし。「二百十番謠目錄」は古記に據りたりと見

を同じく觀阿彌の作としたれども「能本作者註文」に世阿彌の作としたるは誤なる事論なし。又「能作書」には單に小町と見えたりども「禪風習道目錄」には小町ともそとは小町とも書きたり。其頃既に卒都婆小町の名ありきと見ゆ。又「歌舞髓腦記」、「拾玉得花」に小野小町の名見え、「文安田樂能記」にも小野小町の名あり。古き原作は田樂の小野小町にや。「親元日記」には寛正六年三月九日の條に音阿彌が「小町」を演ぜし事見え、曲名の右脚に細字を以て「そとは」と註せり。小町卒都婆の名は此種の註書に始まりたるなるべし。

七九 **山本小町**

シテ小野小町。ワキ季長。狂言從者。所攝津山本。時秋。

何某の季長、草花に心を寄せて山野に出で、白菊の咲き亂れたる藁屋に老ひ衰へたる小町に逢ふ。小町歌話をなし、又五節の舞を舞ふ。(元寫) 九日

八〇ちよみづこまち〔清水小町〕 別名みよこまち音羽小町

シテ小町の靈。ワキ旅僧。所前京清水寺。後市原野。

旅僧京に上り、清水寺に掛けたる繪馬の中に、老女を畫きて小町の歌を書きたるがあるを見、小町の果を哀む所へ、小町の幽靈なる里の女いで來り、小町の跡を教へんとて市原野へ導く。僧市原野に行きたるに、小町の靈昔の姿を現じて昔語をなし、業平の玉津島詣のことなどを物語り、又舞ふ。(正、元寫)

備考玉津島小町といふは或は此曲の別名か。

八二かよひこまち〔通小町〕 別名しほのせうしやう四位少將・市原小町

シテ四位の少將の靈。ツレ小野小町の靈。ワキ僧。所前山城八瀬山里、後市原野。時夏の終。

八瀬の山里に一夏を送る僧の許に、毎日本實妻木を持ち來る女あり。その名を問ふに

市原野に住む小野と云ひさして消え失す。僧市原野に行きて小町の跡を弔ふに、四位の少將の靈、小町の靈と共に現れ、互に妄執を語り、やがて弔を受けて共に成佛す。

(五)

備考言繼卿記天文二十三年十二月十一日の條、謠本數冊貸借の事見をたる中に「通小町」とあれども古き記録には「歌舞髓腦記」に「通小町」と記せる外、「能作書」「申樂談儀」「糺河原勸進猿樂記」等皆「四位少將」とあり。「運歩色葉集」にも四位少將の曲名を掲ぐ。之を一に市原小町と云ふことは「謠曲評釋」に従ひたれども、此名或は清水小町の一名ならずやとも思はる。「世子六十以後申樂談儀」に「四位の少將は根本(最初の意)大和にしやうたら(聖道の字か)のありしが書きて、金春權の頼多武の峯にてせしを、後書き直されしなり」と記し、別の所に又觀阿彌の作と記せり。觀阿彌が改作して完成したるなるべし。「能本作者註文」に世阿彌の作(原註、觀阿彌作と云説あり)、又「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とせるは共に誤れり。寛正五年四月十日糺河原勸進猿樂の第三日目に演能。「異本糺河原勸進猿樂記」には演者を音阿彌とせり。

二 在原業平

八三 雲林院(乙)

シテ在原業平の靈。ワキ公光。所都雲林院。時春。

芦屋の里の公光といふもの、年頃伊勢物語を愛讀して靈夢を蒙り、雲林院に行きて業平の靈に逢ふ。(觀、寶、剛、喜)

【備考】歌舞髓腦記に此曲見ゆ。又「世子六十以後申樂談儀」に「雲林院の能に「もと常の常無き姿に業平の」とて焼松たいまつふり上げ、さといなり(原文のまゝ)し様、南大門にもうてざりしなり。近江の別當が舞に似せけるなり。舞さりくたふくと捻ぢ着けて舞ひしなり。彼の兩人こと窃に聞きし事なれども、京、田舎、善惡を辨へんため書き置く所なり」とあり。之は近江猿樂風の能につきて云へるなれども、現在のものと大分相違あることを知るべく、又「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作としたることの誤なるをも知るに足るべし。

八三 業平

シテ在原業平の靈。ワキ定家卿の家臣。狂言里人。所大和春日の里。

業平の靈、其曾て住みける春日の里の古跡に現れ、定家の家臣に昔語をなす。(正)

八四 小鹽

シテ在原業平の靈。ワキ都の人。所山城大原。時春。

都の人 大原野に花を見て業平の亡靈に逢ふ。(五)

【備考】毛端私珍抄「禪鳳習道目錄」に此曲見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に金春禪竹の作。又「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿七日春日社祭禮に竹田太夫が演ぜりと見ゆる小原野花見とは此曲を指して云へる假稱ならんか。

三 檜桓の女

八五 **〔檜垣〕** **別名** 檜垣の女・水汲

シテ檜垣の女の靈。ワキ岩戸山の僧。所肥後前岩戸白河。

後撰集に藤原興範と歌よみ交しきと見ゆる檜垣の女の靈、岩戸なる僧のもとに毎日水を汲み來り、亡き跡を弔はんことを乞ふ。僧白河に行きて弔ふに再び現れて昔語をなす。(觀、寶、剛、喜)

備考「世子六十以後申樂談儀」能本作者註文「二百十番謠目錄」等に世阿彌の作なりと見ゆ。又「能作書」「歌舞髓腦記」にも此曲先づ。古くは皆檜垣の女と云へり。之を水汲と呼びしは後世のことなるべし。「文安田樂能記」に田樂能の曲名として擧げたる水汲も惟ふに同じことを作れるなるべし。

八六 **〔釣瓶〕** **別名** 現在檜垣

シテ檜垣の姫。ワキ藤原興範。所肥後白河。

藤原興範、檜垣の姫の庵に息ひたるに、姫歌をよみ昔語して舞を舞ふ。(正)

備考檜垣を現在物としたる後作なり。

四 紀貫之

八七 **〔蟻通〕**

シテ蟻通明神。ワキ紀貫之。所和泉蟻通社。

貫之、雨の夜、蟻通の社と知らずして下馬すべき社内に馬を乗り入れ、神の怒を得たるも、和歌の徳によりて神慮を和ぐ。(五) **ワキ**

備考「世子六十以後申樂談儀」に世阿彌の作と見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謠目錄」同斷。「能作書」「歌舞髓腦記」「拾玉得花」に曲名見ゆ。

八八 **〔五輪碎〕** 五倫碎

前シテたけうぢの神。後シテ宇佐八幡。ワキ紀貫之。所豊前宇佐。

貫之、和歌の徳により、靈夢を蒙りて宇佐の宮に参りたるに、神靈現れて和歌の奥儀を説き給ふ。(元寫)【クセ】五輪碎(一に明石浦)^{九八三}

【備考】和歌を説き碎くに陰陽五大を基としたればかく名づく。

八九^{よし}【吉野】(甲) 芳野^九別名木守(小守・子守・古守)

シテ木守神(前は樵夫)。前ツレ樵夫(神靈)。ワキ紀貫之。所大和吉野山。時春。貫之、吉野に遊び、和歌の徳により木守の神の奇特に逢ふ。(貞、元寫、春)【クセ】^{三九四}

【備考】毛端私抄にシテ用ゐる面に就きて記せり。又貫之が吉野に遊びて天人に逢ひしことを作れる吉野琴といふ曲あり。名寄に吉野貫之とあるは此曲か又は吉野琴かの別名なるべし。

五 紫式部

九〇^{げんじくやう}【源氏供養】 別名紫式部^{むらさきしきぶ}

シテ紫式部の靈。ワキ安居院法印。ワキツレ從僧。所近江石山寺。時春。

安居院の法印、石山の觀世音に詣でんとする途に紫式部の靈に逢ひ、其乞のまゝに石山寺にて源氏物語の供養をなす。(五)

【備考】「文安田樂能記」に源氏の能といふ田樂の曲のことあり。これは此曲の前身ならん。作者に就きては世阿彌禪竹等の記録に無く、「能本作者註文」には世阿彌の作とし、又河上神主(和州十二太夫の先祖)の作とし、「二百十番謠目錄」には金春禪竹の作とせり。いづれも疑あり。「鹽尻」に「猿樂の能に源氏供養といふは源氏物語の表白を取り略して曲舞に作りしなり」と見ゆ。糺河原勸進能初日(寛正五年四月四日)演。勸進猿樂記異本には演者音阿彌。

九一^{けらさきの}【紫野】

シテ紫式部の靈。ワキ雲林院の僧契雲。所山城紫野。時秋。

雲林院の僧、源氏物語を好みて讀み居たるに、紫式部の靈來つて妄執を晴し後世を救

はんことを希ふ。後、僧の弔によつて成佛す。(古寫)

六 和泉式部

九一 和泉式部(甲) 別名 稻荷(甲)(伊奈利)

レテ賤の男の靈。ツレ小式部。ワキ和泉式部家臣。所山城稻荷山。時秋。

和泉式部稻荷山に詣でたる時、式部を見て思ひ初めたる賤の男、終に戀ひ死にたるが、其後其妄執小式部に憑き添ひたるを、佛事をなして成佛せしむ。(元寫、評)

備考「能本作者註文」に稻荷を世阿彌の作とせり。又名寄に稻荷とあるは稻荷の誤傳なり。

九三 花盗人 花偷人

レテ平井保昌。ツレ和泉式部。ワキ保昌家臣。狂言女。所京。時春。

平井保昌禁中にて和泉式部を垣間見、戀の奴となりて度々文を送れども返事なし。或

時家臣に命じ心知れる女をして歌を届けしめしに、切なる心を示すため衛士の目を偷みて禁庭の花一枝を手折り來らば心に任せんとの言傳あり。保昌其夜禁庭に忍び入り花を偷みて歸る(元寫)

九四 和泉式部(乙) 別名 貴船(木船・貴布禰・貴舟)

シテ和泉式部。ツレ式部從者。ツレ藤原保昌。トモ保昌從者。ワキ貴船神職。所山城。貴船社。時暮秋。

和泉式部貴船社に詣でたるに、和歌の徳によりて相別れて久しき藤原保昌にめぐり逢ふ。(元寫)

備考「能本作者註文」に觀世小次郎作とせり。

九五 小式部

シテ和泉式部。子小式部。ワキ式部家人。所山城北野社。時四月。

和泉式部小式部を伴ひて北野社に詣で、時鳥の繪馬を見て歌を詠ず。小式部其歌を論じて當を得たり。かくて神前に神樂を上ぐ。(元寫)

九六 鳴門 鳴戸・鳴渡

シテ和泉式部。ツレ式部從者。ヲキ板野領主古川貞時。ツレ古川從者。狂言古川家人。所前阿波板野後鳴門の沖。時春。

和泉式部玉津島に詣でたる序、和歌を詠じて鳴門の沖の鳴動を鎮む。(正)

九七 和泉式部(丙) 書寫・書寫詣

シテ和泉式部。ツレ侍女。ヲキ性空上人。狂言能力。所播磨書寫山。

和泉式部小式部の先立ちしことを悲み書寫山に參詣す。(新)

文安田樂能記に書寫の曲名あり。古く田樂の能に書寫山に就きて作れるものありしと見ゆ。此曲とこれとは或は關係なきものとも思はるれども參考の爲に記し置く。

九八 誓願寺

シテ和泉式部の靈。ヲキ一遍上人。所京誓願寺。時秋。

一遍上人、三熊野の靈夢に従ひ、六十萬人決定往生の札を誓願寺に弘めたるに、和泉式部の亡靈現れ、上人に乞ひて誓願寺と書きたる額を除け、新に上人の筆に成りたる六字名號の額を上げしむ。(五)

禪風習道目錄に此曲見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とせり。寛正五年四月十日糺河原勸進猿樂第三日目に演じたる事同猿樂記に見え、「親元日記」に寛正六年二月廿八日觀世が演じたること、「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿七日春日祭禮の能に金春が演じたること、「親俊日記」に天文七年二月十三日細川殿にて觀世が演じたること見ゆ。

七 式子内親王

九十九
〔定家櫻〕

シテ櫻の精。ツレ式子内親王。ツレ藤原定家。トモ從者。所山城小倉山莊。時春。

定家卿、小倉山莊に式子内親王と共に栖み、初瀬の櫻一本を移し植ゑて樂み居たり。一日定家の留守に櫻の精美女に化して花下に現れたれば、内親王妬み憤りて打たんとするに、櫻の精忽ち消え失す。かくて内親王定家の歸るを待ちて之を怨ずるに、彼の花の精再び現れて夜遊をなす。(新)

一〇〇
〔定家〕 別名定家葛

シテ式子内親王の靈。ワキ旅僧。所京千本。時十月。

旅僧、時雨の夕、時雨の亭に休らひ居たるに、式子内親王の亡靈現れ昔定家の卿と契

りたるに、死後定家の執心葛となりて墓石に這ひ纏ひ妄執晴れ難きを語り、其弔を受けて成佛す。(五)

備考古くは凡て定家葛と云へり。「禪鳳習道目錄」にもしか見ゆ。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十七日粟田口勸進猿樂の第四日目に演じたること見ゆ。「二百十番謠目錄」に世阿彌の作、「能本作者註文」に禪竹の作とあり。

一〇一
〔式子内親王〕

シテ式子内親王の靈。ワキ旅僧。所京千本。時秋。

僧、千本のあたりにて式子内親王の靈に逢ひ、定家と契りし昔語を聞く。(正)

一〇二
〔小倉御幸〕 別名花鳥

シテ式子内親王に仕へし梅壺の侍從。ワキ右大將秋忠。所山城小倉山。時秋。

式子内親王の隠れさせ給ひしを歎きて、定家卿も程なく空しくなる。君聞し召して哀

に思し、彼の小倉山御幸あらんとて、右大將秋忠を先立ちて見せに遣はさる。秋忠、小倉山に行きたるに、内親王に仕へし老姫行き逢ひて彼の昔語をなす。(元寫)クセ百一首〇八四 定家一字題・一字題九八四

備考名寄に小倉山とあるは此一名なるべし。

八 小侍従

一〇三三 待宵小侍従(甲)

シテ待宵小侍従。子大宮?。ワキ徳太寺左大臣。ワキツレ物かはの藏人。所都。時八月十五夜。

福原の新都成りて、百官新都の中秋の月を見んとする中に、徳大寺左大臣一人都に歸り、待宵の小侍従等と共に月を見る。(元寫)

備考大宮の謠無けれども子方が出でしなるべし。類曲月見あり。

一〇三四 月見 別名待宵小侍従(乙)

シテ待宵小侍従。ツレ徳大寺實定。ツレ大宮。ワキ物かはの藏人。所都。時八月十五夜。

「平家物語」の月見の條を作れるもの、類曲待宵小侍従(甲)と同じことを作れり。(正、新)

一〇三五 小侍従

シテ小侍従の靈。ワキ旅僧。所京近衛河原の大宮。時秋。

待宵小侍従の亡靈旅僧の弔をうけて成佛す。(元寫)クセ八八

九 西行法師

一〇六 初瀬西行

シテ尼御前。ワキ西行法師。所大和初瀬。時秋。

西行法師、初瀬に通夜して、俗に残し、妻の尼となつて詣で來りたるに行き逢ひ、來世を契らんと語り慰めて相別る。(元寫、新)

一〇七 **【松山天狗】**

別名松山・讃岐院・新院

シテ新院(崇徳院)の靈。後ツレ相摸坊(天狗)。ワキ西行法師。所讃岐松山。時春。

西行法師、松山に崇徳院の御廟を弔ひて一首の歌を手向け、目のあたり天狗が新院に仕へ奉りし昔の有様を見る。(元、元寫、剛)

一〇八 **【西行櫻】**

シテ櫻の老木の精。ツレ花見の人々。ワキ西行法師。狂言西行從者。所洛西西山。時春。

西行法師の西山の庵の櫻盛なる由を聞いて、下京邊の者相伴ひて庵を訪ふ。西行「花見と群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の科にはありける」と一首の詠を口ずさむ。其夜櫻の老木の精現れ、櫻の科と云はれしをかこち、身を嘆じて舞を舞ふ。(五)

備考「歌舞髓腦記」「禪風習道目錄」に曲名見ゆ。永正二年四月十六日今春太夫の粟田口勸進猿樂第三日目に演ず。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に禪竹の作とあり。名寄に西行塚とあるは此曲名の誤寫、花西行とあるは此の假名なるべし。

一〇九 **【實方】** 眞方別名立元?

シテ藤原實方の靈。ワキ西行法師。狂言里人。所奥州。時冬。

西行法師陸奥に下り、實方の靈に逢ひしことを作れり。實方は一條帝の時行成と和歌につきて争ひ、陸奥に貶せられて終に任所に身罷りし人なり。(元、元寫) **【クセ】**

備考「文安田樂能記」にも此名見えたるは古く田樂の能にもありしなるべし。「五音三曲集」に謠の一節出づ。「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日音阿彌が勤めしこと見

ゆ。「能本作者註文」には世阿彌の作とあり。又「世子六十以後申樂談儀」に「西行、あこやの松、大方似たる能なり」といへる西行とは惟ふに此曲を指すものなるべし。あこやの松と能柄甚似通ひたり。「元祿謠本」には西行の俗名憲清を義清に作れり。又「元文番外四百五番本」目録には一名を立元と記したれども如何あらん。

二〇〇【西行西住】 西行再住

シテ里の翁。ワキ西行法師。ワキツレ西住法師。男旅の武士。狂言船頭。所前天龍川の渡。後駿河岡部の里。

西行法師、弟子西住を従へて東に下る。西住はもと西行の傳なりしが、西行遁世の時従ひて佛門に入りし者なり。二人天龍川に至るに、以ての外の大水にて、旅人多數一艘の舟に乗らんとして騒ぎあへり。西行等も漸く舟に乗りえてやがて岸を離れんとする時、旅の武士追ひ來り、己も舟に乗らんとて西行を打擲す。西住之を見て憤り、彼の武士と争ひ罵りしが、反て西行の怒に觸れ、法師にあるまじき振舞なれば伴ひ難し

とて終に舟より去らしめらる。西住別を惜み、西行に乞ひて持ちたる笠を換へ、一人岸に残りて別れりぬ。後西行陸奥に下り、阿古屋の松、鹽竈の浦など見廻りたる歸るさ、駿河の國岡部の里に宿りたるに、宿に西住に與へたる笠あり。主に問へば西住は此に宿りて身罷りしなり。西行彼を憐み、歌を詠じて跡を弔ふ。(元寫)

備考西行をワキにしたるも、前シテの無きも訝し。役に誤あるなるべし。「能本作者註文」に作者不明として西行西往(往は住の誤なり)の名を挙げたるは、同書の奥書大永四年より遙に以前の作なることを證するものなるべし。名寄に西行物狂とあるは西行西住の誤傳、西行森住とあるは西行再住の誤傳なり。

二〇一【江口】 別名江口女

シテ江口の君の靈。ツレ同。ワキ旅僧。所攝津江口の里。

旅僧、江口の里を過ぎたるに、江口の君の幽靈現れて西行法師と歌よみかはし、昔を語り、又あでやかなる舟遊の様を見す。(五)

備考「歌舞髓腦記」「拾玉得花」「一休題頌」「禪鳳習道目錄」等金春座に關したる古記に見えたれども、世阿彌に關する記録は無し。「能本作者註文」に世阿彌の作とし、「二百十番謠目錄」に金春禪竹作としたるは後者の方當れるに似たり。「親俊日記」に天文七年二月十三日細川殿にて觀世太夫が演ぜしこと見ゆ。

二三 〔現在江口〕

シテ江口の者(白女)。ワキ西行法師。所攝津江口。時春。

西行法師江口の里にて遊女の家に宿を借らんとし歌よみかはしたることを作る。(元、元寫)

備考江口に準じたる後作なり。

二三 〔雨月〕

ツテ住吉明神。前ツレ神の化身(姫)。ワキ西行法師。所攝津住吉。時秋。

西行法師、和歌の徳により、住吉にて明神の化現に逢ひ、宿を借りて奇特を見る。

(五)

備考「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に金春禪竹作とあり。

二四 〔鳴立澤〕

シテ菩薩の化現(後は天女)。ワキ行脚の僧。ワキツレ同。所相模前鳴立澤。後虎が窟。時秋。

行脚の僧、鳴立澤西行堂にて法師の奇特に逢ふ。(元祿十年刊本)

備考鳴立澤を再興したる俳諧師、大矢數東住居士三千風の適々西行の五百年祭に遇ひて作りし謠なり。其事刊本の跋文に見ゆ。

十 樂 舞

二五 〔絃上〕 玄象・玄上・絃聲

シテ村上天皇の靈。前ツレ梨壺女御の靈。後ツレ龍神。ツレ藤原師長。ワキ師長
從者。所攝津須磨。時秋。

師長琵琶の奥儀を究めんため入唐の志ありて、日本の名残に須磨の月を賞せんとした
る夜、村上天皇、梨壺女御の靈現れて琵琶の秘曲を弾じ、其入唐を思ひ止らしめ、又
龍宮より琵琶の名器獅子丸を持ち來らしめて授け給ふ。(觀、寶、剛、喜)
備考「二百十番謠目錄」に金剛の作とあり。

一六三 船ふね 別名大堰川(大井川)・經信つねのぶ

シテ源經信。子白河院?。ワキ白河院臣下。ワキツレ立衆。所山城大堰川。時
夏。

白河院、一日納涼の爲、大堰川に御幸ありて、詩歌管絃の三船を泛べて遊び給ふ。源
經信後れて參りたるが、船は既に岸を離れたる後なり。大臣之を見て其道を得たらん
舟に乗るべしとの宣旨なりと呼ぶ間に、經信は岸に近き管絃の船に乗り入りたり。經

信は歌の聞えはあれども管絃の聞え無ければ、帝不遜なる振舞なりとて管絃を奏せし
め給ふに、經信畏りて奏する所、亦天下に絶せり。(元寫)

一七 輪りん 管くわん 輪官

シテ冷風車輪管の靈。ワキ朝臣。所攝津難波の沖。時初春。

百濟の樂人輪管、難波の海にて暴風の爲に破船し、空しくなりたれば、勅して佛事を
行はせ給ふ。輪管の靈現れて佛事を喜び、舞樂を奏して御代を祝ふ。(正、新)

一八 乙おと 平ひら

シテ舞人乙平。ワキ善峰寺の僧善慧。所攝津難波。時秋。

善慧、佛菩薩の舞樂につきて質さんため、難波寺の舞人乙平を問ふ。乙平舞の手を傳
へ、舞樂と佛法との關係を説く。(元寫) 七七八

二九〇【富士太鼓】

シテ樂人富士の妻。子富士の娘。ワキ萩原院の官人。狂言從者。所都。内裏に七日の管絃ありて、天王寺より淺間といふ樂人召されたる時。住吉の樂人富士といふ者、同じく太鼓の役を望みて京に上りしかば、淺間惡みて終に其宿所に殺す。富士の妻これを知らずして富士を尋ね上り、初めて此事を聽きて狂氣の如く恨みかこち、形見の太鼓をうちて悲しむ。(五)

【備考】能本作者註文に世阿彌の作とあり。

二九一【梅枝】

シテ富士の妻の靈。ワキ身延山の僧。所攝津住吉。時春梅咲くころ。

樂の争にて樂人淺間に討たれし富士と云ふ樂人の妻の幽靈、旅僧に宿を與へて弔を乞ふ。(觀、實、剛、喜)

【備考】富士太鼓を過去物に作りなしたる曲なり。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿彌の作とあり。

二九二【馬融】

シテ樂人馬融の靈。ワキ大臣。ワキツレ陰陽博士。狂言臣。所唐土。

帝の御惱以ての外にて醫療其驗なき爲、博士を呼んで占はせたるに、先帝の惡行甚しく罪無き者を罪したる中に樂人馬融を江南の江に沈めたるが深く祟をなせりといふ。よつて管絃講を以て跡を弔ひたるに、彼の靈現れて御代を祝ふ。(元、元寫)

【備考】元祿版番外本には博士を狂言の役となせりと見え、其詞を掲げず。「能本作者註文」に作者不明として曲名を擧ぐ。

二九三【天鼓】

前シテ王伯。後シテ天鼓の靈。ワキ後漢の臣下。所唐土。時秋。

國の傍に王伯王母といふ夫婦あり。夢中に天より鼓降り下ると見て一子を擧げ、天鼓と名づけて育てたるが、後天より眞の鼓降り下る。帝此事を聽き其鼓を召されたるに、天鼓悲みて呂水に投じて身罷りぬ。其後帝かの鼓を打たせらるゝも更に音を出さず。由りて王伯を召して打たせらるゝに初めて音を發す。帝憐に思し呂水に行幸ありて管絃講を以て天鼓を弔ひ給ふ。天鼓の亡靈弔を喜びて現れ、彼の鼓を打ちて舞ふ。
(五)

【備考】禪風習道目錄に曲名出づ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とせり。「親元日記」に寛正六年三月九日音阿彌が演ぜしこと見ゆ。

十一 雜

【玉津島】

シテ衣通姫の靈(前は女舟人)。ワキ都の者。所前紀伊和歌浦。攝津玉津島。時春。

都の者、三熊野の歸るさ、玉津島に詣でんとして衣通姫の化身なる遊女の舟に乗り、玉津島に參りて奇特を見る。(貞、元寫)

【備考】流布本花傳書に曲名見ゆ。又名寄に衣通姫とあるは此曲の一名ならん。

【家持】

前シテ秦安國。後シテ鬼。ツレ姫。ワキ家持。トモ藏人。所都。

家持、萬葉撰集の敕を受け、妻の病危きため姫の引き止めたるも聽き入れずして參内す。姫、心一つに母を悲み、陰陽博士秦安國を呼び、母の命を我が命に轉じかへしめて空しくなる。家持やがて歸り來り、之を聽きて嘆きしが、夢幻の間に鬼現れ、火車を引き來り姫を載せ去らんとする時、姫一首の歌を詠じたるに、目に見えぬ鬼神も之に感じぬと見えて蘇れり。此姫後日聖武帝の后となり、世に光明皇后といはれたり。
(貞、元寫)

【備考】此曲藤原不比等の女なる光明皇后を家持の女とし、又大伴家持を藤原家持に作れ

り。

一三五 **〔太平樂〕** 泰平樂

シテ住吉明神。ツレ神功皇后神靈。ワキ藤原爲兼。所攝津住吉。時秋。

爲兼「扇のねこ」といふ歌の敕題を得て詠み惱み、住吉に詣で、神の告を待ちたるに、明神、神功皇后の神靈と共に現れ、教を垂れ給ふ。(正)

備考 キリに太平樂を奏する一條あるによつてかく名づく。

一二六 **〔宗貞〕**

シテ宗貞の妻。ツレ侍女あこね。トモ從者。子花若。ワキ遍昭。(良峯宗貞)

所前山城大原。後都。時春。

宗貞、仁明天皇の崩御を悲みて大原に遁世せしが、北の方、侍女を使として參内せんことを乞はしめ、直衣冠などを届く。宗貞(遍昭)肯せず、衣冠に文を添へ、之を形見

にせよとて侍女に持たしめて返す。北の方聞きて心狂ひ、衣冠を見て泣き悲む。(貞、元寫)

一二七 **〔小鍛冶〕** 別名小狐

シテ稻荷明神。ワキ三條小鍛冶。ワキツレ橘道成。所都。

三條小鍛冶宗近、稻荷明神の神助を得て勅の御劍を打ち奉る。(五)

一二八 **〔玉敷の雪〕**

シテ清少納言。ツレ皇后。ツレ侍女。所禁中。時冬。

清少納言雪の日宮中に簾をかゝげたる故事。(明治四十一年刊本)

備考 高木半作文、觀世清康作曲、明治の新作なり。

一二九 **〔橋姫〕**(甲) 別名住吉橋姫

シテ 橋姫神靈。ツレ住吉神靈。ワキ都の僧。所山城宇治。

慧心僧都平等院にて一切經を供養せし時、木の葉一葉僧都の袂に散りしを見れば、蟲喰のあとにて『極業へゆく舟の便に』と歌の下の句かゝれたり、僧都とりあへず『のり知らん人を尋ねて渡さばや』と上の句をつけたるに、聽衆の中なりし女、それにては我等如き迷の身は洩れたりと悲みて、『知る人も知らぬ人をも渡さばや』とつけたるといふ昔語あり。此曲は此昔語と、住吉明神が宇治の橋姫と契れりといふ事とを結びつけ、歌道を嗜む都の僧の宇治に至りたるに、橋姫の神靈現れて蟲喰の歌に上の句をつけしは我なりと語り、又住吉明神と共に神體を現じて神と神との戀に酔ひ、夜遊をなしたる事を作れり。(元寫)

備考別に同名異曲あり。名寄に蟲喰とある曲名は此曲の一名にや。「能本作者註文」に世阿彌の作とあり。

一三〇 **【阿古屋松】**

シテ 鹽竈明神神靈。ツレ神靈の從。ワキ藤原實方。トモ從者。所前陸奥 後出羽。

時九月。

藤原實方、鹽竈の神靈に導かれて阿古屋の松を見、又神の奇特を拜す。(明和本外)

クセ 四六

備考「世子六十以後申樂談儀」に「西行、あこやの松、大かた似たる能なり」と見ゆ。「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。

一三一 **【鴨長明】**

シテ 鴨長明。子長明侍童。ワキ都の人。ワキツレ同。所山城日野。時春。

都の人、鴨長明の日野山の方丈に立ち寄り、長明の物語を聞く。(評)

備考創作時代不明、「謠曲評釋」に出でたるもの、外此名を聞かず。

一三二 **【九十賀】**

シテ俊成入道釋阿。ツレ定家。ワキ藤原秀能。ワキツレ大臣。所禁中仁壽殿。時
建仁三年十一月廿三日。

俊成卿の九十の賀宴を仁壽殿に催させ給ひしことを作る。(正)

一三三【明靜】 明星

シテ明靜(藤原定家)の靈。ワキ都の者。所叡山安樂寺。時十月十五日。

都の人歌人の舊蹟を見廻り、比叡山の安樂寺に明靜(定家の法名)の墓を弔ひたるに、
定家の靈いで、佛道を語る。(元寫)【クセ】_{六九四}

備考此謠には式子内親王との戀の物語無し。

一三四【徒然草】

シテ洛中の者の友人。ワキ洛中の者。所都。

洛中の者徒然草を愛讀し、友を訪ひて其祕事を聞く。(元寫)

一三五【花鳥風月】

シテ神子、花鳥。ツレ神子、風月。ワキ萩原院の臣下。狂言家人。

萩原の院の扇合に、様々の扇の中、公家と上臈とを書きたるがあり。或人は業平の畫
と云ひ、或人は光源氏といひて、何れとも判じ難し。これを神子花鳥、風月の二人に
占はせしに、同じく判異りて決せず。かくて二人の神子更に祈念を籠めたるに、光源
氏の靈花鳥につきそひて昔を物語る。(新)

一三六【御駒乘】

シテ貞政。ツレ朝臣?。子帝?。ワキ大臣。ワキツレ從者。所都。時八月。

吉例により關東より奉りたる御駒を南殿に於て觀覽あり。月卿雲客連り居たる中に、
誰か馬形を申し上げよと宣旨あり。道の者貞政選ばれ、出で、馬事を語り、又縦横に
これを御して面目を施す。(元寫、新)

二三七【和國】倭國

シテ和國。ワキ旅僧。狂言里人。所山城北野。時秋。

歌道に心をよせて現なくなりし和國といへる狂人、右近の馬場にて旅僧に歌物語をなす。(正、評)【クセ九五】

一三八【辛崎】唐崎

シテ海東幸若丸の靈。ワキ旅僧。所近江辛崎。時秋。

上野足利の僧、辛崎に宿りて幸若丸の曲靈に逢ひ、其跡を弔ふ。(正)

一三九【仲遠】別名脈論

シテ朱丹溪の靈。ワキ仲遠。

漢士の朱丹溪の靈現れ、醫術の奥儀を傳ふ。(元寫)【クセ九五】

備考此別名を脈論といへども十四經脈論五七〇といふ謠ひ物とは全く別なり。

一四〇【竹弄】

シテ竹弄(算法の師)。ワキ難波の者某。子某の子。

難波の者、一子を連れて算法の師を訪ひ、算法の教を受くることを作れり。(享保版便用謠)

備考便用謠のことは驛路に説けり。

一四一【躰の端】

シテ師。ワキ近江の者某。子某の子。狂言中京邊の者。所京。

近江の某、一子を連れて京に上り、師を求めて、六藝其他の習ひ方、躰け方の問答をなすことを一番の曲に作れり。(享保版便用謠)

備考「使用謠」のことは驛路に説けり。

一四三 〔驛路〕

シテ老人。ワキ飯田某。ワキツレ某の弟。

飯田兄弟西國より都に上り、或碩學の老人に驛路の事を聞き、東海道を江戸に下り、歸路は別れて東海道木曾街道の二道より京に上りたることを作れり。(享保八年版便用謡)

〔備考〕「便用謡」は三浦庚妥が刊行したるものにて、専ら兒童の教育に資する爲多數の實用謡を集めたるものなり。此曲は東海道木曾街道の地理を教ふるために作られしものなり。

一四四 〔仁慶〕

シテ仁慶。子熊若。ワキ増尾長次。所京。

舞謡の上手に仁慶といふ者あり。増尾、一子熊若を其門に入らしめて曲舞。鞆鼓。謡

曲の由來を聞き、又其舞を見る。(新)

一四四 〔塚詣〕

シテ芭蕉翁の靈。ワキ僧(行脚俳諧師)。所粟津義仲寺。

俳諧行脚の僧、芭蕉の跡を粟津に弔ひて其亡靈に逢ひ、俳諧の物語をなす。(時代不明刊本)

〔備考〕芭蕉追善の爲に作られし曲なり。曲中ワキの詞に芭蕉の歿後の事を云ひて「星霜すでに廿餘年云々」とへり。芭蕉の死は元祿七年なり。

一四五 〔赤壁〕

シテ後赤壁賦中の仙禽孤鶴の精。ワキ黃州の者。所唐土赤壁。時初秋。

黃州の者赤壁に遊びたるに、昔蘇東坡が此に遊びし時の老鶴(仙禽)の精現れ、東坡が前後赤壁賦を作りし昔語をなし、又舞を舞ふ。(評)

備考名寄に蘇東坡とあるは此曲をさして云へるにや。或は卒都婆の假名書に文字を當てたるものにや。

第四 武人

一 源頼光及其郎黨

一四六 **大江山** おほやま 別名酒呑童子(酒天童子・酒點童子・酒願童子)

レテ酒呑童子。ワキ源頼光。ワキツレ同行山伏。狂言能力。狂言童子侍女。頼光の一行山伏姿となりて大江山に入り、酒呑童子を退治す。(観、實、剛、喜)

備考能本作者註文「に世阿彌の作、二百十番謠目錄」に宮増の作とあり。

一四七 **幽靈酒呑童子** いりしゆてんどうじ 幽靈酒天童子・幽靈酒願童子・別名千丈嶽

シテ酒呑童子の靈。ワキ今熊野客僧。所丹波大江山。

山伏天の橋立に行く途中、大江山にて酒呑童子の靈に逢ふ。(元寫)

備考言繼卿記「永祿三年正月の條に此名見ゆ。類曲語酒呑童子とは、ワキが山伏なる」と、旅僧なるとの相違の外は、文も大同小異なり。同曲は此曲を改竄したるものにや。

一四八 **語酒呑童子** かたりしゆてんどうじ

シテ酒呑童子の靈。ワキ旅僧。所丹波大江山。時秋。

旅僧九世戸に行く途次、大江山にて酒呑童子の靈に逢ひ昔語を聞く。(正)

備考類曲幽靈酒呑童子参照。

一四九 **羅生門** らせいもん 羅城門 らじやうもん 綱

シテ鬼神。ツレ源頼光。ワキ渡邊綱。ツレ藤原保昌。ツレ貞光。ツレ季武。ツレ金時。所山城。時春。

頼光大江山に鬼神を退治し以來、日夜郎黨を集めて武を談ず。一夜春雨に宴を張りた

る席上、綱、保昌、羅城門に鬼神の栖めることを言ひ争ひ、綱終に羅城門に至りて、鬼神と戦ひ其片腕を斬る。(觀、實、剛、喜)

備考 能本作者註文「及二百十番謠目錄」に觀世小次郎の作とせり。「言繼卿記」に弘治二年二月十二日演能の事見ゆ。

一五〇 〔姫切〕

シテ鬼神(橋姫)。ワキ渡邊の源五綱。所山城宇治川。時春。綱、宇治川にて鬼神(橋姫)に逢ひ之を斬る。(正)

一五一 〔土蜘蛛〕

シテ土蜘蛛の精。ツレ侍女胡蝶。ツレ頼光。トモ頼光從者。ワキ頼光郎等。ワキツレ郎等數人。所都。

葛城山に年を経し土蜘蛛の精、頼光を惱ましたるが、一日頼光名刀膝丸にて之を斬り

つけたるに怪物傷を負ひて逃れ去る。郎等血の滴に従つて栖處を知り、終に之を退治す。(五)

備考 現行はるゝものは元祿以前の原作に比べて文拙し。

二 前九年役

一五二 〔歸雁〕

シテ八幡太郎義家。トモ從者。子石清水八幡神體。所前山城後武藏野。時後春。

義家東夷追討の御暇乞の爲石清水八幡に詣で、奇特に逢ひ、教のまゝに兵學を學びたる徳により、武藏野にて歸雁の列の亂るゝに伏兵あることを知り、敵を燒討にかけて亡すことを得たり。(元、元寫)

一五三 〔貞任 別名衣川〕

シテ阿倍貞任の靈。ワキ藏林院の僧。所奥州衣川。

僧奥州に下り衣川にて貞任の靈に逢ふ。(元、元寫)

【備考】春日拜殿方諸日記に寶徳四年二月十二日の薪の猿樂に金剛太夫が演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」に世阿彌の作。

一五四 影山 陰山

シテ義家の臣影山某。ワキ八幡太郎義家。ワキツレ敵兵數名。所奥州衣川。

衣川の戦に、敵、謀を以て名馬鬼黒を放ちたるを、影山捕へて義家に献じ、敵の亡ぶべき兆なりと喜ぶ。やがて義家之に乗じ諸士を従へて攻め寄せんとしたるに、彼の鬼黒は遽に奔逸して義家を敵陣に乗せ歸る。影山義家の危きを見、追ひ行きて縦横奮戦し、困うじて義家と共に凱旋することを得たり。(元寫)

一五五 信夫 信夫景利

シテ信夫太郎景時の靈。ワキ旅僧。所奥州信夫の原。時秋。

八幡太郎安倍貞任、宗任を討ちし時戦死したる景時の靈、其名残の松の陰に現れ、旅僧に昔語をなす。(元、元寫)【七六八九】

【備考】此曲別名に信夫景利とあれど、曲中の人名は景時なり。「利」は「時」の誤傳なるべし。「春日大宮若宮御祭禮圖」の田樂の能の曲名に此名あり。古く田樂の能にありしものによ。「能本作者註文」に作者不明とあり。

三 平治の亂

一五六 鎌田

シテ正清の妻の靈。後シテ鎌田兵衛正清の靈。ワキ僧(千丈。所尾張野間の内海。

千丈僧になつて昔の故郷野間に歸り、鎌田兵衛夫妻の靈に逢ひてその跡を弔ふ。(新)【備考】能本作者註文に作者不明。

一五七 [朝長]

前シテ青葉長者の娘。トモ從者。後シテ太夫進朝長の靈。ワキ旅僧(もと朝長の傳某)。ワキツレ同伴僧。所美濃青葉。時五月。

もと朝長の傳なりし清涼寺の僧、朝長の跡を弔はんとて青葉に下り、墓前にて朝長が自害せし長の宿の娘に逢ふ。やがて伴はれて其家に行き法事をなしたるに、朝長の靈現れて昔を語る。(五)

【備考】歌舞隨腦記に此曲見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。

一五八 [惡源太] 別名義平(義衡)

シテ惡源太義平。ツレ難波次郎經遠。ワキ石山寺の住僧。所近江石山寺。

石山寺にて惡源太の捕はるゝことを作る。(貞、元寫、評)ワキ兵揃六八五

一五九 [石山義平] 石山義衡

シテ惡源太の靈。ワキ僧。所近江石山寺の邊。時夏。

石山寺のほとりに一夏を送る僧の許に、しばし花を持ちて來る男あり。一日名を問はれて惡源太の靈なりと名のり、在りし世の様を物語りて弔を乞ふ。(新)

一六〇 [材木義平] 材木義衡別名材木・材木惡源太

シテ義平の靈。ワキ行脚僧。所京六波羅。時春。

僧、六波羅に義平の靈に逢ふ。(新)

【備考】物語の文中に重盛が材木に上りしことあるにより、他の義平の曲と區別する爲かく名づけしなるべし。

四 鬼界ヶ島の流人

一六二 **卒都婆流** ソトハナガシ **別名** 康頼 ヤナヨリ

シテ平康頼。ツレ熊野權現。ワキ丹波少將成經。所薩摩の海鬼界ケ島。

康頼、成經、鬼界ケ島に流されりて、故郷戀しさの餘り三熊野を勸請し、日毎に歩を運ぶ。一夜千本の卒都婆を造り和歌を詠じて波上に流さば歸洛の願適ふべしとの靈夢を見、喜んで祝詞を上ぐ。即ち權現出現し歸洛の適ふも和歌の徳なりと託宣あり。(元寫) **クセ** クセ

一六三 **俊寛** シムンクワン **別名** 俊寛僧都・鬼界島(鬼海島)・硫黄島 シムンクワンソウブ 鬼かいがしま いわうがしま

シテ俊寛。ツレ康頼。ツレ成經。ワキ赦免の使。狂言船頭。所薩摩の海鬼界ケ島。時九月。

鹿ヶ谷の陰謀破れて鬼界ケ島に流され居たる流人の中、成經康頼のみ赦免せられ、俊寛一人島に残されたる時の様を作れり。(觀、寶、剛、喜)

備註此曲名「歌舞髓腦記」にも見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。

一六四 **成經** セキネ

シテ新大納言成親の靈。ワキ丹波少將成經。所備前兒島如意尻。時春。

鬼界ケ島に流され居たる成經、相國よりの特赦を得て都に歸る途次、備前兒島にて父成親の流され居たりし跡を尋ね、其亡靈に逢ひて墓前に弔へば、亡靈在りし世の物語をなす。(正)

三 源頼政及其興黨

一六五 **鶴** ツル **別名** 鶴・鶉・夜鳥 ツル ひとつしん

シテ鶴の亡靈。ワキ旅僧。所攝津芦屋の浦。時四月。

頼政に射落されし鶴の亡靈、旅僧に昔話をなし、讀經を乞ひて成佛することを作る。

(五)

備考「元文寫本」に別名を一心と稱ふる由記せり。今假に記して疑を存し置く。「親元日記」に寛正六年三月九日演能のこと見ゆ。「能本作者註文」に世阿彌の作、「二百十番謠目錄」に觀阿彌の作とあり。

一六五 **【現在鳩】** 別名 現世鳩

シテ鳩。ワキ頼政。ワキツレ大臣。ワキツレ猪の早太。所山城禁中。時五月。

頼政敕命を奉じて、猪の早太を従へ、帝に御祟をなす怪物を殿上に射落したることを作れり。(明曆外)

備考「禪風習道目錄」に此曲見ゆ。古き作なるべし。「謠諸流名寄」に喜多流にて謠ひしやう記せり。

一六六 **【頼政】** 別名 源三位・宇治頼政

シテ源三位頼政の靈。ワキ旅僧。所山城宇治。時五月。

頼政の亡靈、平等院にて旅僧に昔語をなす。(五)

備考「世子六十以後申樂談儀」に世阿彌の作と見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謠目錄」同断。「能作書」「歌舞隨腦記」にも此曲見ゆ。又名寄に平等院とあるは此一名なるべし。

一六七 **【龍崎】** 別名 東頼政・渡り殿

シテ頼政の靈(渡り殿の神)。ワキ宇治より出でたる僧。所下野古河。

宇治の僧東に下り、下野の古河に宿りて、今は渡り殿の神と崇められたる頼政の亡靈に逢ふ。(元寫)

一六八 **【信連】** 別名 長谷部尉・長兵衛・長兵衛尉

シテ長谷部兵衛の尉信連。ワキ越中前司守俊。狂言頼政の使者。所京都高倉

の宮。時五月。

頼政、宮を勧め奉りて平家を討たんとしたる事現れ、六波羅の兵高倉の宮に攻め寄せたる時、長谷部信連一人宮に止り、勇戦して遂に捕へられたるを作る。(貞、元寫)
備考「能本作者註文」に作者不明とあり。又名寄に長谷兵衛尉とあるは誤なり。

一六九 福井瀧口

シテ瀧口。(渡邊競)。ワキ福井三郎。所山城。

治承の亂に渡邊競平家を詐つて名馬南鐙を得、之に宗盛と焼印して平家の陣に放ち、六波羅勢と戦ひつゝ、三井寺に急ぎしことを作れり。(新)

備考名寄に瀧口とあるは此一名なるべし。

一七〇 一來法師

シテ一來法師。ツレ討手大勢。子高倉宮。所山城宇治。

治承の亂、宇治川の合戦に、一來法師橋上に武勇を奮ふ。(元、元寫)
備考名寄に宇治川とあるは或は此曲の一名か。

六 本會義仲及其一黨

一七一 木曾

シテ覺明。ツレ木曾義仲。ツレ池田次郎。ツレ從兵。所越中砥並山猿が馬場。

義仲砥並山にて埴生八幡宮に詣で、覺明が筆を揮ひたる願書と、表指の鏑矢とを奉納して戦勝を祈り、やがて俱利伽羅の谷に大捷することを作る。(明曆外、明和外、觀)

ク七 願書(一名木曾願書) 八三 砥並山 八八五

備考「能本作者註文」に作者不明とあり。

一七二 太刀堀

シテあこねの前。ワキ蓮沼某。ワキツレ家人。所越中礪並山。

越中蓮沼の何某、礪並山に畑を開かせたるに、或日世に見事なる太刀を堀り出したる者あり。これを家の寶とせんとするに、あこねの前(妻なるべし)俄に狂氣づきて葵御前の靈うつり、義仲が俱利伽羅落しの昔を語る。(元寫) **クセ**太刀堀葵(一に葵巴) 三九 俱利伽羅落 三九

備考「能本作者註文」に葵を世阿彌の作、太刀堀を作者不明と記せり。

一七三 **兼平**

シテ今井兼平の靈。ワキ木曾路の僧。所近江栗津の原。時夏。

木曾の僧、栗津原に義仲の蹟を弔はんとして兼平の亡靈に逢ひ、其昔語を聴く。

備考「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあり。「世子六十以後申樂談儀」に柴舟といふ曲名見え、柴舟の作物を用ゐることを記せり。或は此の兼平を指すにや。

一七四 **巴**

シテ義仲の妾巴の靈。ワキ木曾山家の僧。所近江栗津の原。時正月。

木曾の僧、栗津の原にて巴の亡靈に逢ひ、義仲が自害したる松の蔭に旅寢して、當時の戦のやうを聞きたることを作れり。(觀、寶、喜、春)

備考「二百十番謠目錄」に觀世小次郎の作、「能本作者註文」に作者不明とあり。

一七五 **現在巴**(甲)

別名今生巴(今世巴)

シテ巴。ツレ寄手の兵。ワキ源義仲。ツレ今井兼平。ツレ立衆。所近江栗津。

栗津の戦にて、巴、強ひて落つべきやう命ぜられ、一度は落ちんとしたるも、合戦始まれりと聞きて駆け返し力戦することを作れり。(貞、元寫)

備考名寄の金生巴、令生巴は何れも今生巴の誤なり。此曲現在巴(乙)とは文少しく異れり。

一七六 **【現在巴】(乙)**

シテ巴。ツレ源義仲。ワキ恩田八郎師重。ツレ兵數名。所近江粟津。

粟津の戦にて、巴落つべさやう命ぜられたるも肯かず、粟津の原に戦ふことを作れり。(剛)

備考現在巴(甲)を短くし少し文を改めて作り變へたるものなり。

一七七 **【御臺巴】**

別名形見巴・切合巴

シテ巴。ツレ御臺所。ツレ寄手の兵。ワキ木曾御所の者。所信濃木曾。

義仲討死の後、巴形見と鬢の髪とを持ち、忍びて木曾の御所に歸り、御臺所に戦の物語をなして共に悲ひ。かゝる所へ鎌倉の寄手攻め寄せたれば、巴出で合ひて寄手を追ひまくり、御臺所と共に衣引きかづきて御所を落つ。(元寫)

備考此一名を切合巴といふこと「元文寫本」に見えたるが、或は御台巴の文字の誤が後

日別名となりたるには非るか。

一七八 **【衣潜巴】**

衣加奇巴・衣昇巴

シテ巴の靈。ワキ木曾の僧。所上總埴生。

木曾の僧、上總の國のある磯邊にて海士に逢ひ、其宿に泊りたるに、海士は則ち巴の幽霊にて、昔を語り廻向を乞ふ。(正)

備考謠の切に「うす衣心静に引きかづき」云々の詞あり。これは他の巴の謠にもあれど、演能の時特に衣をかづく形ありし爲かく名づけしものならんか。

一七九 **【清水冠者】**

シテ清水冠者義基。ツレ義基の妻(頼朝女)。ツレ瀧口。ワキ河野三郎。ワキツレ郎等。所相模鎌倉。後下野那須野。

清水冠者、妻の情にて一たび鎌倉を落ち、奥州をさして下りたるも、那須野の原にて

捕へらる。(新)

七 平家一門及郎黨

一八〇 〔内〕府 〔重盛(甲)〕・教訓

シテ小松内府重盛。ツレ從者。ワキ淨海入道(清盛)。ワキツレ家貞。所京都六波羅。

小松内府、父清盛が後白河法皇を攻め奉らんとするを聞きて馳せ來り、之を諫止したる事を作る。(元)

〔備考〕いろは名寄に小松とあるは此別名なるべし。

一八一 〔重盛(乙)〕

レテ平重盛。ツレ主馬判官盛國。ワキ平清盛。ソキツレ平宗盛。ワキツレ郎等。ワキツレ難波次郎經盛。ワキツレ貞能。所京六波羅。

重盛、父清盛が後白河法皇を攻め奉らんとする由、盛國の注進によつて知り、六波羅に馳せ行きて之を諫止す。(明治三十四年喜多流刊本)

〔備考〕飯田巽の作文、喜多流紀喜和の節附なり。曾て飯田氏自らシテを勤めて英照皇太后の台覽に供へしものなり。

一八三 〔熊野〕 遊屋・湯谷

シテ熊野。ツレ侍女朝顔。ワキ平宗盛。トモ從者。所山城。時春。

宗盛の妾熊野、老母の病重き由の文を得て、故郷に歸らんと暇を乞ひたれども許されず、反て東山の花見に伴ひ行かれたるが、村雨に花の散るを見て詠じたる歌により歸國を許されて歸る。(五)

〔備考〕歌舞隨腦記「拾玉得花」「禪鳳習道目錄」等に此曲名見え、「栗田口猿樂記」に永正二年四月十三日同勸進猿樂(金春)の初日に演じたる事見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謠目錄」共に世阿彌の作とあり。又名寄に宗盛とあるは此一名なるべし。

一八三 **實盛** 眞盛別名篠原・篠原實盛

シテ齋藤別當實盛の靈。ワキ上人(相模他阿彌上人か)。ワキツレ從僧。所加賀篠原。

實盛の靈、廻國の上人の説法の場に來りて弔を乞ひ、昔語をなして成佛を得。(五)

備註 世子六十以後申樂談儀「能本作者註文」「二百十番謡目錄」に共に世阿彌の作と見え、「能作書」「歌舞髓腦記」等にも曲名出づ。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日(三日目)音阿彌演、「蔭涼軒日録」に寛正六年九月二十七日春日祭禮の能に音阿彌演、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十七日(四日目)演能等のこと見ゆ。又「言繼卿記」には永祿十三年八月十八日の條日吉太夫演能五番の中に篠原實盛とあり。

一八四 **現在實盛**

シテ齋藤實盛。ツレ手塚太郎光盛。ツレ手塚郎等。ワキ平宗盛。トモ從者。所前

都。後加賀。

實盛軍に従ひて北國に行かんとするに當り、宗盛に乞ひて錦の直垂を賜はり、やがて鬢髯を墨に染めて戰に臨み、手塚太郎に討たれしことを作る。(新)

備註 類曲實盛を現在物に改めし作なり。

一八五 **實檢實盛** 實見眞盛

シテ樋口次郎。ツレ木曾義仲。ツレ從兵。ワキ手塚太郎。所加賀篠原。

篠原の合戦終つて、義仲高名の面々を集め、討ち取りたる首を實檢す。中に手塚がとりたる首の主不審なれば樋口を召して見するに、樋口、實盛なるべしとて前なる池にて洗ふ。果して實盛が白髪を墨に染め居たるなり。(貞、元寫)

備註 「能本作者註文」に作者不明。

一八六 **御室經正** 御室經政別名御室・今生經正(今生恒政・金生經政)・現在經正(現在經政)

シテ但馬守平經正。ワキ大納言の僧都行慶。トモ從者。所山城^前御室御所^後桂川。

平家都を落ちんとする時、經正御室御所に參りて御暇乞をなし、青山の琵琶を返しおきて退出したるが、其夜其桂川にあるを聞き、御所なる行慶行き訪ひて餞別の宴を張る。(貞、元寫) **現在經政**^{五八八}

一八七 **經正** 經政・恒正

シテ平經正の靈。ワキ僧都行慶。所山城仁和寺。時秋。

經正、幼少より仁和寺覺法親王の寵を蒙り、青山といふ琵琶を賜はり居たるが、平家一門都落の時之を返上しゆきやがて戰死せり。此曲は其後仁和寺御室御所にて經正の冥福を祈り、彼琵琶を手向けて法事せられしに、彼の幽靈現れて之を彈じたることを作れり。(五)

備考「春日大宮若宮御祭禮圖」の田樂の能の事を記したる中に此曲名あれば、古く田樂

の能に演ぜられし事明なり。「能本作者註文」「二百十番謡目錄」に世阿彌の作とあるは世阿彌が田樂の能より取りて大成したるにや。「禪風習道目錄」にも曲名見ゆ。「光源院御元服記」に天文十五年十二月演能の事出づ、演者觀世太夫。

一八八 **楊賀** 楊家・陽賀

シテ巫子。ツレ飛彈守景家。ワキ平宗盛。狂言從者。所山城山崎。

平家都を開きて山崎に來りし時、宗盛、景家が一子楊賀を手に懸けしことを聞き、哀に思ひて巫子の梓にかけしめたるに、彼の死靈移り來て物語をなす。(元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明。「松尾名寄」には陽嘉の字を當つ。

一八九 **現在忠度** 現在忠則

シテ薩摩守忠度。ツレ五條三位俊成。所山城。時秋。

忠度都を落ちて一度は狐川まで行きたれども、夜にまぎれ立ち歸りて五條に俊成を訪

ひ、年來の歌の巻物を托して救選の時加へられんことを頼み置き、名残を惜むことを作る。(元寫)

一九〇【俊成忠度】 俊成忠則別名五條忠度

シテ平忠度の靈。ツレ藤原俊成。ワキ岡部六彌太。所山城京。時春。

忠度を討ちたる岡部六彌太、其形見たる短冊を俊成の許に持ち來り、共に忠度の上を語る。こゝに彼の亡靈現れて修羅の苦患を訴ふ。(觀、實、剛、喜)〇。

備考 いろは名寄に俊成とあるは此一名なるべし。「能本作者註文」には内藤藤左衛門(原註、後ニハ河内守ト云)の作となり。

一九二【忠度】 忠則・忠教別名短冊忠度(短尺忠則)・薩摩守

シテ薩摩守平忠度の靈。ワキ旅僧。所攝津須磨。時春。

忠度の靈現れて、曾て俊成の臣なりし旅僧に昔の物語をなし、又弔を乞ふ。(五)

備考 世子六十以後猿樂談儀に世阿彌の作として薩摩守を擧げ、「能本作者註文」「二百十番謡目録」に世阿彌として忠度を擧ぐ。「能作書」「歌舞隨腦記」「禪風習道目録」等にも曲名見ゆ(但「能作書」には薩摩守)。又「禪風習道目録」に別に「短冊忠度などに詞にて「兩馬があひにどうと落つ」と云ふには廻るべきやう無し。やがて膝をつきて善し」と記せり。古く觀世方にては薩摩守と呼び習はし、金春方にては短冊忠度と呼びしにや。下りて「親俊日記」に見えたる天文七年二月十三日細川殿にての觀世太夫の能には今と同じく忠度と記せり。

一九三【生田忠度】

シテ忠度の亡靈。子忠度の子息。ワキ僧(飛禪の前司光盛)。所攝津一の谷。

様を變へて一門の遺跡を弔ひ廻れる平家の遺臣飛禪の前司光盛、一日忠度の息の父が最後の跡を見たしといふを具して一の谷に至り、彼の亡靈と語らふ。(新)

一九三 **【志賀忠度】** 志賀忠則

シテ忠度の靈。ワキ北國方の僧。所近江志賀。時春。

旅僧志賀にて忠度の靈に逢ふ。「さゝ波や云々」の歌を基として昔語をなす由作れり。
(元、元寫)

備考 能本作者註文「に世阿彌の作。」

一九四 **【現在敦盛】**

シテ熊谷直實。ツレ平敦盛。所攝津一の谷。

一の谷の戦破れて平家西海に落ちし時、敦盛は内裏に置き忘れたる漢竹の横笛を取りに歸りたるため一門に後れ、馬を波間に乗り入れて船を追ふ。源氏方の熊谷次郎之を見て呼び戻し、戦ひて組み伏せたるが、其公達なるを知つて哀に思ひ、一度は助けんとしたるも果さず。やがて之を斬つて己も又佛門に入る。(元寫)

一九五 **【敦盛】** 厚盛・篤盛 **別名** 草刈敦盛

シテ平敦盛の靈(前段は草刈男)。ツレ前シテに従ふ草刈男。ワキ蓮生法師。所攝津一の谷。

蓮生法師曾て己が討ちたる敦盛の靈に逢ふ。(觀、實、剛、喜)

備考 「世子六十以後申樂談儀」能本作者注文「二百十番謡目錄」に世阿彌の作とあり。されども「文安田樂記」にも此名見えれば既に田樂又は猿樂の能にありたる曲を世阿彌の改作したるなるべし。曲名「能作書」にも出づ。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月七日(第二日)、申樂談儀(後人の書人)に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能に演じたる事見ゆ。「言繼卿記」に見えたる天文廿三年三月十二日の能の番組にはあつもりと書きたる肩に草かりと小書せり。草刈敦盛の名古く所見無きは此の如き小書に起りたる後世の別名なるべし。前シテの草刈男に化して出づるによりかく云へるなり。

一九六 經盛 常盛別名形見送

シテ熊谷の使者。ツレ經盛北の方。ワキ平經盛(敦盛の父)。トモ從者。所阿波
鳴戸の浦。

熊谷の使者(類曲形見敦盛には鹽谷十郎とあり)、敦盛の形見を届くる爲經盛の舟に至り、敦盛の最期の様を物語る。(元寫)

【備考】世子六十以後申樂談儀に「船を青ねりぬきなどにて些と飾るべし」とあるは舟の
作物を用ひしなるべし。同書に又「常もりの能に、物語、辨慶などの云ふ事には變る
べし。泣きく女を訪ふなれば、ほろりと云ひて、さるから健氣に、あるべき所に眼
をつけて云ふべし」と云ひ、又「常もりの能、此女思ひ入れてすべきを皆淺くするな
り。人の謠ふまで俯向き入りて其うちより口説き出すべし」と云へり。他の曲に比べ
て記録多きは屢々演ぜられし爲なるべし。「能本作者註文」に作者不明とあり。類曲形
見敦盛は次第もこれと同じく事柄も全く同じけれども後の作なるが如し。

一九七 形見敦盛 筐敦盛

シテ平經盛。ツレ北の方。ワキ熊谷の臣鹽谷十郎。所阿波鳴戸の沖。

熊谷の臣、敦盛の形見を届くるため平家の舟に至り、敦盛の最期の様を物語る。(正)
【備考】類曲經盛參照。

一九八 生田敦盛 別名生田

シテ敦盛の靈。子敦盛子息。ワキ法然上人の從侶。所前山城賀茂社。後攝津生
田森。

敦盛の子息、賀茂明神の靈夢により生田の森にて父の靈に逢ふ。(觀、室、剛、春)
【備考】二百十番謡目錄に生田敦盛、禪鳳作とあり。「能本作者註文」には生田を禪鳳の
作に數へ、他の四曲と共に「脇能以上五番」と記せども此曲脇能に非ず。

一九九 **高野敦盛**

シテ敦盛幽霊。ツレ幸菊丸の侍女。子敦盛子息幸菊丸。ワキ蓮生法師。狂言宿の者。所紀伊高野山。

敦盛の子幸菊丸、侍女に伴はれて紀伊に下り、高野山に入りて偶々蓮生法師に逢ひ、父の敵を討たんとしたるが、反つて父を弔ふ蓮生の厚き情に動かされ、其弟子とならんとす。かゝる處に敦盛の亡霊現れ、昔を語りて成佛を喜ぶ。(元、元寫)

二〇〇 **知章**

シテ平知章の靈。ワキ西國の僧。所攝津須磨。時二月七日

旅僧、知章の命日に一の谷に來り合はせ、彼の亡霊に逢ひて昔語を聞き、其跡を弔ふ。(五)

備考「禪鳳習道目錄」に曲名見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作。

二〇一 **通盛** 道盛・陸盛

シテ平通盛の靈。ツレ小宰相局の靈。ワキ僧。ワキツレ僧。所河波鳴戸。時秋。

阿波の鳴戸に一夏を送る僧、毎夜磯にいで、平家一門の爲に讀經したるに、通盛小宰相の靈あらはれ、弔を喜びて昔を物語りたることを作れり。局は通盛と契深く彼の討死の後を追ひて阿波の波間に沈みし人なり。(五)

備考「能作書」に「如此軍體云々」とあり。又「歌舞髓腦記」にも曲名見ゆ。「申樂談儀」に世阿彌の作(「二百十番謠目錄」も同様)と見えれば「能本作者註文」に世阿彌の作とあるは誤なり。「看聞日記」に永享四年三月十五日仙洞御所假舞臺にて演ぜられしこと(曲名の所に通盛小宰相事とあり)見え、「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十三日薪の猿樂に觀世太夫が演ぜしこと見ゆ。

二〇二 **清經** 清常

シテ平清經の亡靈。ツレ北の方。ワキ清經の臣淡津三郎。所山城京。時冬。
 平清經の家臣淡津三郎、豊前柳が浦の沖にて海に投じたる清經の形見を持ちて京に歸
 る。清經の妻其形見を見て悲ひ所に彼の亡靈現れて敗戦のことどもを語る。(五)
 【備考】世子六十以後申樂談儀「能本作者註文」二百十番謠目錄に世阿彌の作と見え、
 「能作書」歌舞隨腦記「禪鳳習道目錄」等にも曲名見ゆ。永正二年四月十三日粟田口勸
 進猿樂の初日に演ぜらる。

二〇三 教經

シテ能登守教經の靈。ツレ教經の乳母三位の局。ワキ局の從者都の者。トモ從
 者。所長門の浦。時秋。

教經の乳母、平家一門の跡を弔はんため長門に下りたるに、能登守の亡靈出で、平家
 が亡びし當時の物語をなす。(元寫)【クセ】先帝四八五
 【備考】能本作者註文に作者不明として先帝の名を擧ぐ。

二〇四 碇潜 碇加奇・碇被

シテ平知盛の靈。ツレ二位尼の局の靈。ワキ旅僧。所長門早友浦。
 旅僧、二位の尼と知盛との亡靈に逢ひ、平家が亡びし昔語を聞く。(觀、實、剛)【クセ】
 【備考】能本作者註文に作者不明として碇被を擧ぐ。

二〇五 侍従重衡 別名侍従

シテ長者の女、侍従。ツレ平重衡。ツレ侍女初花。ワキ梶原景時。所遠江池田。
 重衡囚人となりて鎌倉に送らるゝ途次、遠江の池田の宿に宿る。長者の女侍従、歌を
 贈り又酒をすゝめて一夜の夜遊に重衡の旅情を慰めしむ。(貞、元寫)
 【備考】此の曲のシテは熊野のシテと同人なり。

二〇六 千手 千壽別名千手重衡・重衡(乙)

シテ千手の前。ツレ平重衡。ワキ狩野介宗茂。所相模鎌倉。時夏。

平家敗れたる時生捕となりし重衡、鎌倉に召し下されたるを、頼朝、千手の前といふ美姫を送つて慰めしむ。一日雨の夜、重衡、千手と寂しき宴をなし、或は琵琶を弾じ或は舞を舞ひて果敢なき契をこめたるも、再び都に送らるゝ身となりて悲みの中に相別る。(五)

【備考】禪風習道目録に千壽とあり。名寄に千萬とあるは此草體の誤寫なるべし。二百十番謠目録には禪竹作とあれども、「能本作者註文」には彌次郎の作とし二名を列ね、又禪竹の作として重ね記したり。偶々同本の信じ難きを示すものにして、作者は二書一致せる禪竹と見ること至當ならん。之を重衡と云ひしは慶長前後の謠本の外題紙によりて知るを得るも、「申樂談儀」に見えたる重衡とは別なり。古くは後の笠卒都婆を重衡と云ひ、同曲を笠卒都婆と呼ぶに至りし後、此曲を一に重衡と云ひしなるべし。

1107 笠卒都婆 別名重衡(甲)

シテ平重衡の靈。ワキ旅僧。所大和奈良。時春。

旅僧奈良坂のほとりに至りたるに、盛なる花の陰に重衡の亡靈現れて回向を乞ふ。(貞、元寫)

【備考】此曲古くは重衡と云へり。「世子六十以後申樂談儀」に「重衡に」こゝぞ閻浮の奈良坂に、此「こゝぞ閻浮の奈良坂に」の節、曲舞に有るまじき節なり。小歌節なり。曲舞ならば送りて引ん訛ざるやうなるべし」と見え、又「重衡の能に」鬼ぞつくなる恐ろしや「に」つくなる」と突いて云はば「あそろ」の「ろ」を納めて云ふべし。「つくなる」とすぐに云はゞ「あそ」の「そ」に心を入れて突きて云ふべし」と見ゆ。傳はる所「こゝぞ閻浮の奈良坂に」の辭あれど「鬼ぞつくなる」の辭無し。「看聞日記」に永享四年正月十四日仙洞にて重衡を演じたる事出づ。後世之を笠卒都婆と云ふは文中に「笠卒都婆の花の陰にかくれけり」とあるに由る。

1108 生捕盛久

シテ主馬判官盛久。ツレ土屋三郎。ツレ土屋郎等。ワキ成合寺住職。ワキツレ土屋の使者。所丹後成合寺。

盛久、成合寺を頼みて忍び居たるに、住僧心變りし、土屋三郎と謀りて盛久に酒を薦め、終に之を生捕る。(元寫)

二〇九 **盛久** 守久

シテ主馬の盛久。ワキ土屋三郎。ワキツレ太刀取。所相模鎌倉(初は京よりの旅中)。時春。

盛久生捕の身となり鎌倉由比が濱にて斬られんとしたるが、觀音信仰の利益により、太刀取が振りかざしたる太刀段々に折れたる奇特あり、又頼朝と夢合の奇特ありて其死を免ぜらる。(五)

備考「二百十番謠目錄」に元雅の作とし、「能本作者註文」に世阿彌の作とあり。「世子六十以後申樂談儀」の後人の記入と見ゆる中に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能の

日演ぜられたること見ゆ。「禪風習道目錄」にも此曲出づ。「言繼卿記」には守久と記せり。

二一〇 **大原御幸** 小原御幸

シテ建禮門院。ツレ阿波内侍。ツレ大納言局。ツレ後白河法皇。ワキ萬里小路中納言。ワキツレ大臣。トモ供奉官人。所山城大原。時初夏。

平家亡びて後、後白河法皇、大原の寂光院に建禮門院を訪ひ給ふ。(觀、寶、剛、喜)備考「拾玉得花」に十體風姿の第六麗體に擧ぐ。「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とし、「能本作者註文」に作者不明とせり。

二一一 **祐氏**

シテ伊東左衛門祐氏。ツレ伊豆山の僧。ワキ僧兵。ワキ土屋五郎光遠。トモ從者。ワキツレ郎等。所伊豆。

祐氏平家の大将として戦ひ、軍散じて後、伊豆の寺に忍び居たるが土屋五郎鎌倉の討手として攻め寄せ、終に之を生捕る。(新)

二二三 **大佛供養** 別名 奈良詣

シテ悪七兵衛景清。ツレ景清の母。ツレ頼朝。ワキ頼朝従者。トモ頼朝従者。所大和奈良。時建久六年三月。

平家亡びて後、景清常に頼朝を狙ひ、南都東大寺に大佛供養あるを聞いて社人の姿して近づきたるも、見現されて終に果さざりしことを作る。(五)

備考「能本作者註文」に作者不明。

二二三 **景清** 別名 盲目景清

シテ盲目の乞食となりし景清。ツレ景清の女人丸。トモ従者。ワキ里人。所日向宮崎。時秋。

景清の女日向に流されて盲目の乞食となれる父を尋ねゆきて八嶋にての高名の物語など聞きて別れ歸る。(觀、寶、剛、喜)

備考「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に世阿彌の作。「飯尾宅御成記」の寛正七年二月廿五日の條、觀世又三郎が能を演ぜし時の番組に見ゆ。

八 源行家及源範頼

二二四 **行家**

シテ源行家。ワキ常陸坊淨明。ツレ郎等。狂言宿の主。所和泉石津。

行家熊野に忍ばんとする途次、石津の宿にて淨明に捕へらるゝことを作る。(元寫、古寫叢)

二二五 **範頼**

シテ源範頼。ツレ源頼朝。ワキ梶原景時。ワキツレ梶原郎等。所前相模鎌倉 後伊

豆修善寺。

範頼、梶原の讒によりて頼朝に疑はれ、遂に修禪寺に攻められて自害し果つ。(元寫、正)

九 源義經及其與黨

二一六 常盤問答

シテ常盤御前。ワキ東光坊阿闍梨。ツレ從僧。所山城鞍馬山。時春。

花盛なる頃、常盤御前鞍馬寺に上りて、東光坊阿闍梨に牛若丸を頼まんことを乞ひ、やがて昇りたる朧月に舞を舞ふ。(元寫)

備考文中阿闍梨と常盤との問答あり、よりてかく名づく。名寄に常盤、山中常盤とあるは共に此一名なるべし。

二一七 鞍馬天狗

シテ大天狗。子沙那王。ワキ東谷の僧。狂言能力。狂言小天狗。所山城鞍馬山。時春。

沙那王(牛若丸)鞍馬山の花下にて大天狗に兵法を學ぶ。(五)

備考類曲鞍馬あり。又名寄に鞍馬判官とあるは他の何々判官といふに對して云へる此曲の假稱なるべし。「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に宮増作とあり。「異本糺河原勸進猿樂記」(流布本には檜原)に寛正五年四月十日勸進猿樂の三日目に音阿彌が演ぜしこと見え、「親元日記」に寛正六年三月九日音阿彌が演ぜしこと見ゆ。

二一八 鞍馬

シテ大天狗。子沙那王。子平家公達。ワキ鞍馬寺住僧。狂言能力。所山城鞍馬山。時春。

沙那王大天狗より兵法の一卷を與へらるゝことを作る。(元寫)

備考類曲鞍馬天狗と大同小異なれども鞍馬天狗にては平家の公達と共に花を見居たる

時に天狗に逢ひたるやう作り、これは沙那王夜なく本堂に参りて祈誓を籠め居たるを、一夜住僧伴ひ行きし時、天狗に逢ふやうに作れり。

二一九 湛海

レテ湛海。子牛若。ワキ鬼一法眼。ワキツレ從者。狂言法眼家人。所都五條天神。

鬼一法眼、牛若丸を討たんとして聲なる長谷部の湛海に謀る。湛海やがて五條天神に牛若を待ち之と戦ひたるが、却て首を打ち落さる。(正、元寫、剛)

備考 一本に牛若丸を沙那王に作る。

二二〇 橋辨慶

レテ武藏坊辨慶。ツレ慶辨從者。子牛若丸。所都五條橋。時夏。

牛若丸五條橋に辨慶と戦ひ、之を従へしことを作る。(五)

備考 「二百十番謡目録」に安清作とし、「能本作者註文」に作者不明とあり。

二二二 橋辨慶の前 別 笛の巻

前シテ常盤御前。子牛若丸。ワキ羽子田十郎顯長。所都。

橋辨慶の前段を變へたるものなり。牛若丸鞍馬の寺にありて、學文に勵まず偏に武術に心を寄せ、又五條の橋に出で、夜々人を斬るため、義朝の臣羽子田、伴ひて常盤のもとにゆき教訓を乞ふ。常盤學文に勵むべき由を諭し、一萬三千餘歳を経て弘法大師の手に渡り、又牛若の手に渡るべきやうの蟲喰の文字ある横笛を牛若に與へて鞍馬寺に歸らしむ。橋辨慶の後段に續くべきものなり(元寫、觀)

二二三 烏帽子折 現在熊坂(乙)

前シテ烏帽子屋亭主。前ツレ妻(鎌田正清の妹あこやの前)。後シテ熊坂長範。

後ツレ長範手下大勢。子牛若丸。ワキ三條吉次。ワキツレ吉次弟吉六。狂言早

打。狂言赤坂の宿の主。所前近江鏡の宿。後美濃赤坂の宿。

牛若、三條吉次を頼みて奥州へ下る途次、鏡の宿にて烏帽子を折らせて計らずも鎌山兵衛の妹阿古屋に逢ひ、又赤坂の宿にて強盜熊坂長範を斬る。(觀、實、剛、喜)

【備考】翁草「名寄の現在熊坂に『烏帽子折の別名とあり云々』と註せり。名寄に吉次(一名信高)とあるは此曲の假稱にや。又「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞にて九郎判官東下向を演じたりと見ゆるは此曲をさすなるべし。「二百十番謠目錄」に宮増作とあり。

【現在熊坂】

別名熊坂(乙)

シテ熊坂長範。子牛若丸。ワキ三條吉次。所美濃青葉。

牛若丸吉次に伴はれて奥州に下る途中、青葉の宿にて強盜熊坂を討つ。(元)

【備考】曲の初に吉次の次第、名乗、道行あり。次いで熊坂の名乗ある以下の文は、凡て類曲熊坂の後半の文に同じ。熊坂を現在物に作り替へたる後世の作なり。「能本作者註文」に作者不明として熊坂(原註に現在能とあり或は烏帽子打を指すか)の名を掲げたるにより同本の奥書大永四年以前に存したること明なり。同本には現今の熊坂を別に幽靈熊坂として擧げ

たり。

【熊坂】 別名幽靈熊坂

シテ熊坂長範の靈。ワキ旅僧。所美濃赤坂。時秋。

熊坂長範の亡靈、旅僧に昔語をなし、廻向を乞ふ。(五)

【備考】世子六十以後申樂談儀の後人の記入と見ゆる中に、永正十一年十月廿八日南都雨喜ひの能に演ぜられしこと見ゆ。當日前後十七番。「二百十番謠目錄」に禪竹の作と見え、「能本作者註文」には作者不明として幽靈熊坂の名を列す。同本に單に熊坂とあるは其割註により後世の現在熊坂なること明なり。

【關原與一】 關原與市別名關原

シテ牛若丸。トモ從者。ワキ關原與一。ワキツレ郎等。狂言里人。所美濃山中。時春。

牛若、鞍馬をいで、東に下る途次、美濃の國山中の里にて關原與一の一行に行き遭ひ、其無禮に憤つて之と戦ひ、數人を斬り與一の馬を奪つて逃れ走る。(貞、元寫、寶、喜)

二二六 つる
〔鶴若〕

シテ佐藤繼信。ツレ佐藤忠信。ツレ郎等。ツレ義經。子鶴若。所奥州狹布の里。佐藤繼信、義經に従ひて奥州を出づる時、幼子鶴若を諭して發足したるが、鶴若猶父と共に戦に出でんことを希ひ、狹布の里まで追ひ來り、強ひて軍に従はんと乞ふ。されど病に臥したる繼信の妻の鶴若を止めんとする文を持てるを見、之を便に説き諭して涙ながら再び郷に歸らしむ。(元、元寫)

備考「能之圖式」其他に鶴君と見えたるは此曲名の誤傳なり。又繼信死後の鶴若のことは攝待に作られたり。同曲參照。「能本作者註文」に作者不明とあり。

二二七 どどのかげ
〔二度懸〕 二度掛 坂落・梶原二度懸

前シテ鷲の尾の父。ツレ義經。子鷲の尾。後シテ梶原景時。所攝津一の谷。

義經轉越に坂落しをして一の谷を攻めんとし獵夫の子に案内をなさしめ、これに鷲の尾の名を與ふ。一の谷に梶原景時二度懸して戦ふ。(貞、元寫)

備考「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿五日春日社祭禮の能に今春が演じたること見ゆ。「嬉遊笑覽」に曲名を梶原座論の一名の如く斷ぜるは誤なり。「能本作者註文」に作者不明とあり。

二二八 しん
〔八島〕 屋島 八島判官(屋島判官)

シテ義經の亡靈(前には漁夫妻)。前ツレ前シテの從者漁夫。ツキ旅僧。所讃岐屋島。時春。

旅僧屋島の浦にて義經の亡靈に遇ひ、源平合戦の昔話を聞く。(五)

【備考】此曲の後段のみを變へたるものに熊手判官あり。「申樂談儀」「禪鳳習道目錄」に曲名見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に世阿彌の作とあり。演能に就きては「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月四日勸進猿樂初日、「親元日記」に寛正六年二月廿八日仙洞御能、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日勸進猿樂三日目、「三好筑前守義長朝臣亭へ御成記」に永祿四年三月卅日、各此能演ぜられしこと見ゆ。

三二九
【熊手判官】

シテ義經の亡靈。ツレ平教盛の亡靈。前ツレ義經郎等の亡靈。ツキ旅僧。所讚岐屋島。時春。

旅僧屋島の浦にて義經の亡靈に遭ひ、目のあたり屋島の戦に義經が熊手にかけられんとしたる其の様を見る。(元、元寫)

【備考】前段全文及待謡は八島に同じ。八島の後段の替謡なるべし。「言繼卿記」に天文廿三年十月に演ぜられたること見ゆ。

三三〇
【嗣信】
次信別名八島寺

シテ佐藤繼信の亡靈。ツキ旅僧。所讚岐八島寺。旅僧繼信の墓を弔ひ、其亡靈に遭ふ。(元寫)

【備考】能本作者註文に世阿彌の作と見えたる次信は此曲にや。將、他の嗣信(甲)にや。

三三一
【櫻間】

シテ櫻間の介義遠。ツレ郎等。ツキ源義經。ツキツレ信夫次郎。ツキツレ郎等。所阿波勝浦。

義經櫻間の館を襲ひ櫻間を討つことを作る。行文拙し。(貞、元寫)

三三二
【遠矢】

シテ淺利與市。ツレ源義經。ツレ井ノ木四郎近清。所長門壇の浦。

壇の浦の戦に、平家方の強弓引井ノ木四郎が判官の船に十四束三つぶせの矢を射たるを、淺利與市十五束の矢にて射返し、井ノ木を射殺したることを作る。平家物語の「遠矢の事」の條を作れるなり。(正)

【備考】いろは名寄「能の圖式」等に壇浦といふ曲あるは此一名なるべし。

【母衣】二三四 別名ナ須奈須(那須)・奈須與一(甲)(奈須與市・那須與市)

シテ奈須與一。子龜若丸。ワキ五十嵐小文治。トモ從者。所越後。

奈須與一、蜂屋藏人國定を討ちて科を蒙り、越後に流されて五十嵐小文治に預けらる。小文治、兒龜若丸の十三なるに具足着をさせんとて、與一が八島に扇の的を射し、其他の高名を思ひいで、具足親を與一に頼みて宴を張る。(元寫)【クセ】六九二 與一張良が母より母衣を授けられし物語をなす條あるためかく名づく。「能本作者註文」に作者不明として那須與一の曲名を擧ぐ。

【正尊】二三四 昌俊・正存別名土佐坊・土佐正存

シテ土佐坊正尊。ツレ義經。ツレ光景。ツレ江田源三。ツレ熊井太郎。ツレ土佐郎等。子靜御前。ワキ武藏坊辨慶。所京堀川。時九月。

土佐坊正尊(明和本に限り昌俊)堀川御所に義經を襲ひ反て敗れたる事を作る。(觀、實、剛、喜)【クセ】起請文五八三

【備考】能本作者註文「及二百十番謡目錄」に彌次郎の作とあり。「言繼卿記」天文廿三年三月十二日の條に演能の事見え、曲名を土佐正存とせり。

【芦屋辨慶】二三五 別名四國落

シテ武藏坊辨慶。子義經。ワキ芦屋三郎光重。ワキツレ從兵。狂言舟子。所攝津芦屋の里。

義經一行、四國に落ちんとして、芦屋の里にて襲はれしことを作る。(正)

二三六 **舟辨慶** 船辨慶

前シテ靜御前。後シテ平知盛の亡靈。子源義經。ワキ武藏坊辨慶。ワキツレ義經
郎等。狂言船頭。所攝津尼ケ崎。

義經尼ケ崎にて靜に別れ、海路西國に下らんとしたるに、海上にて平家一門の亡靈に
遭ひ、風波の爲に船を押し戻さる。(五)

備考「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に觀世小次郎の作。

二三七 **沼 搜** 沼探

シテ惡鬼(大蛇の精魂)。ワキ武藏坊辨慶。所櫻池。時春。

辨慶雲間に大蛇を射、其矢の止りたる櫻が池を搜りたるに、大蛇の精靈惡鬼となりて
現れ、義經のやがて亡ぶべきを云ひ、又己は假に安徳天皇に身をかりたるなりとて、
平家一門の亡靈を沼の面に浮べ、射られし怨を晴さんとしたるが、反つて辨慶の爲に

斬り拂はる。(新)

二三八 **吉野三位** 芳野三位

シテ曼陀羅院三位。ワキ別眞言院の武藏。ワキツレ普賢院の駿河。ワキツレ衆
徒。所大和吉野。

義經金峯山を頼んで身を寄せたるに、鎌倉より急使立ちて義經を討つべき由布命あ
り、一山の衆徒議して終に鎌倉の命に従ふことに決したるが、曼陀羅院の三位一人之
に同ぜず。由りて翌日衆徒義經を討たんとする手始にとて曼陀羅院を攻む。三位戦ひ
て自刃す。(元寫)

二三九 **吉 水**

シテ吉水の坊。子花菊。子あこ王。ワキ岡崎何某。所京六條河原。時春。

金峯山の吉水の坊主、義經を隠し、罪により鎌倉殿の御内岡崎某に生捕られ、六條河

原に斬られんとするを稚兒花菊、あこ王の二人、最期の酒宴の鼓を打つとて詐つて岡崎を討ち取り、師の坊を救ひて共に逃れ歸る。(元、元寫)

備考名寄に二人兒とあるは或は此曲の假稱にや。

二四〇【吉野靜】 芳野閑

シテ靜御前。ワキ佐藤忠信。狂言衆徒。所大和吉野山。

義經吉野を落ちたる時、忠信靜と謀りて僧兵の追躡より免れしめんとし、忠信は都道者を粧ひて頼朝義經和解せりと衆徒を欺き、又靜は法樂の舞を舞ひて衆徒の足を止めしことを作る。(五)

備考現今五流の中喜多流を除きては皆半能の形式となせるが、之は始次項の吉野靜の前に續けて完曲なりしを演能の都合上約めたるなるべし。喜多流獨前後段を有するは喜多流の獨立したる當時既に四流に於て半能となし、別に次項の前段を存して時に完全なる一曲となして演じ居たるものならんか。「言繼卿記」には吉野閑の名見えたれ

ど、古記に曲名見當らず。恐らく古く靜と稱したるが此曲なるべし。靜御前に關する古曲は別に二人靜、安達靜あれども何れも古く其名見えたれば單に靜とのみ云ひたるを此曲と見ること至當なるべし。靜に就きては「世子六十以後申樂談儀」に「しづかの舞の能」と見え、又世阿作として擧げたる外、「能作書」「歌舞髓腦記」等にも記録あり。又「看聞日記」に永享四年三月十四日(しづか)と書きたる肩に白拍子と小書せり、「親元日記」に寛正六年三月九日(觀世)の能の事見ゆ。此中「親元日記」の記録は同本別所に二人靜及安達靜の曲名出でたるに由り、單に靜と云へるもの、以上二曲以外の曲なるを推するに足ると云ひ得んか。但、記録の年月には甚しき開きあり。參考の爲に記し置く。「二百十番謠目錄」に觀阿の作「能本作者註文」に世阿彌の作とあり。

二四一【吉野靜の前】

シテ靜御前。ワキ佐藤忠信。所大和吉野山。

靜と忠信と吉野山に逢ひ、吉野を落るたる義經の前途を安からしむる爲、忠信は都道

者に扮して衆徒を欺き、静は法樂の舞を奏して共に追手を止まらしめんと約することを作れり。(元寫)

備考吉野静の前段なり。觀、寶、剛、春の四流は此前段を省き、吉野静を古くより半能の形式になし居れども、喜多流のみは之に續けて完曲のまゝ演じ居れり。

二四二 法事静

シテ静の亡靈。ワキ吉野の者。所大和吉野。時春。

吉野の者、勝手の宮に詣でんとする途次、静の亡靈に遭ふ。即ち其跡を弔ふに、彼の靈、弔を喜びて舞を舞ふ。(新)

二四三 二人静

シテ静御前の亡靈。ツレ菜摘女(後に静の亡魂憑き添ふ)。ワキ勝手の神主。

所大和吉野。時正月七日。

吉野勝手の社に正月七日夏箕川の若菜を摘ましめて神前に供ふる神事あり。此神事の菜摘の女に、静の亡魂憑き添ひて、昔を語り又舞を奏したる事を作る。(五)

備考菜摘女に静の亡魂の憑き添ひたる(ツレ)と其亡魂の實體なる静(シテ)と相舞ふ如く作れる故に此名あり。二人の静の中菜摘女の方は人の目に見え、亡魂の實體は人に見えざるものとして作れるなるべし。着想類無し。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌の作とあれど「申樂談儀」其他に此名見えず。「談儀」に魂とのみ記せるは此曲に非ずして吉野静なるべし。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日其第三日目に音阿彌が演じたること見え、「栗田口猿樂記」に永正二年四月十七日勸進猿樂四日目に特に御座敷よりの御所望により今春太夫が演じたること見え、「親元日記」に文明十五年三月十七日演能の事見ゆ。

二四四 鶴岡

シテ静。ワキ工藤祐經。所相模鶴岡。時四月。

静、鎌倉に召し下され、鶴岡八幡にて舞を舞ひたることを作る。(貞、元寫)

備考類曲安達静あり。参照。

二四五 **【安達静】** 別名若宮静・御前静

シテ静。ツレ安達三郎。ワキ頼朝。ツレ實平。所相模鎌倉。

静、鎌倉に召し下され、静岡若宮八幡の社前にて舞を舞ひしことを作る。(元、元寫)

備考類曲鶴岡あり。安達静とは安達三郎が鼓の役を勤むるによりて名づけたるものなり。「能本作者註文」に作者不明と見え、「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこ
と見ゆ。

二四六 **【卯花重】**

シテ静御前。ツレ静の母。ツレ頼朝。ツレ政子。ツレ立衆。ワキ梶原景茂。所鎌倉。時初夏。

静、鶴岡に舞を奏せしことを作れり。(明治刊本)

備考高木半作文、觀世清孝節附、明治の新作なり。

二四七 **【忠信】** 別名空腹・吉野忠信・矢倉忠信

シテ佐藤忠信、ツレ源義經。ツレ僧兵數人。ワキ伊勢三郎。所大和吉野山。

義經吉野を頼み身を寄せたるも、衆徒變心して夜討すべき由聽えられたれば、又こゝより
遁れ落つ。忠信一人後に留り、寄手の僧兵を引き受けて矢倉に上り防矢を射、やがて
空腹切つて後の谷に轉び落ち、其まゝ義經の後を追ひて吉野を逃る。(觀、實)

備考「いろは名寄」に矢倉忠信とあるは此曲別名の誤なり。「能本作者註文」及「二百十
番謡目録」に世阿彌の作とあり。

二四八 **【愛壽忠信】** 別名愛壽

シテ愛壽御前。ツレ討手大勢。ワキ佐藤忠信。狂言力壽御前。所京。

吉野より逃れし忠信、都に上りて力壽御前の家に身を寄せんとしたるも、力壽すでに變心し居たれば、愛壽御前の所に至つて忍び居たるに、力壽の訴によつて討手に襲はれ、終に愛壽と共に白刃し果つ。(元、元寫)

【備考】「言繼卿記」に天文廿三年十一月廿一日の條に謠本貸借の事見え、其中に此曲あり。當時一般に謠ひしものと見ゆ。

二四九 **【安宅】** あだか けうぐわん 別名安宅判官

シテ武藏坊辨慶。ツレ義經郎等九人(山伏姿)。子方義經。ワキ關守富樫某。狂言能力。所加賀安宅。時二月。

義經奥州に落つる途、辨慶の計により、南都東大寺建立勸進の山伏と詐つて安宅の關を過ぎしことを作る。(五) **【ワキ勸進帳】**ハニ

【備考】「二百十番謡目録」に小次郎の作、「能本作者註文」に作者不明とあり。「運歩色葉集」には曲名を安宅判官とせり。名寄に富樫とあるは、此曲の聯想によつて幸若舞の

曲名を混入したるものなるべし。「親元日記」に寛正六年三月九日觀世太夫が演じたること見ゆ。

二五〇 **【攝待】** せつ たい 接待

シテ佐藤兄弟の老母。ツレ義經。ツレ兼房以下郎等(山伏姿)。子繼信の遺兒鶴若。ワキ武藏坊辨慶。狂言佐藤從者(菊王)。所奥州。時春。

義經一行、山伏に装ひて奥へ落つる途、故佐藤庄司の館にて接待をうけ、佐藤兄弟の母と繼信の遺兒鶴若との情にひかれて包み居たる名を名のり、又繼信討死の時の物語をなす。(觀、寶、剛、喜)

【備考】「二百十番謡目録」に宮増の作とし、「能本作者註文」に作者不明とせり。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能の事見ゆ。「異本糺河原勸進猿樂記」に同勸進猿樂の三日目に音阿彌が攝津を演じたりと見ゆるは、攝待の誤なるべし。但し流布本には確とありて攝津と無し。又別に鶴若のこゝを作れる曲鶴若あり。

三五二 錦戸

シテ泉三郎忠衡。ツレ忠衡の妻。(佐藤繼信の妹)。ワキ錦戸太郎國衡。ワキツレ國衛郎等。所陸奥。

秀衡の子國衡、父の遺志に背き義經を討たんことを弟忠衡に謀りたれども、忠衡肯ぜず。國衡憤りやがて兵を集めて忠衡を攻む。忠衡の妻は自刃し忠衡は終に捕へらる。

(觀、寶、剛)

備考 今本古本文甚しく異り、寶生本觀世本の相違も少からず。又今本には忠衡の妻が繼信の妹なること無し。「能本作者註文」に宮増の作とせり。

三五三 清重

シテ駿河次郎清重。ツレ伊勢三郎義盛。ワキ梶原景時。ツレ立衆。狂言宿の亭主。狂言梶原從者。所武藏入間の里。

清重、義盛の二人、義經の廻文に従ひ山伏姿となりて發足し、入間の里に一夜を語り明かし、翌日義盛は鎌倉へ、清重は京に志して相別れしが、清重途に梶原の鷹狩に行くに遭ひ終に見現されて戦ひたる末自殺す。(元寫)

備考 能本作者註文に作者不明とあり。

三五三 鈴木

シテ鈴木三郎重家。ツレ重家の母。ツレ頼朝。ツレ從者。所前紀伊後相模鎌倉。

義經奥州へ落ちたる後、紀伊に在りたる其家臣重家、頼朝の大舉して奥州を攻むべき由を聞き、老母に暇を乞ひて奥へ下らんとす。後段重家奥州へ下らんとしたる途に捕へられて頼朝の前に引き出されたるが、頼朝が義經を斥けんとする事の非理なるを説き、又頼朝を詐りて假に其家臣となることを誓ひ、夜に紛れ逃れ出で、奥に下る。

(元、元寫)

備考 「二百十番謡目錄」に觀阿彌の作と見え、「能本作者註文」に作者不明と見ゆ。「言繼

卿記」の永祿十一年正月廿六日の條に演能の事を記し、曲名を鱸と書きたり。當字なるべし。又同書天文廿三年七月廿四日の條、公卿間に謠本を貸借したる記事の中にすずきあり。當時一般に謠ひたりと見ゆ。

二五四 おつかけすずき 【追懸鈴木】 追掛鈴木

シテ鈴木重家。ワキ梶原の臣大間經正。ワキツレ從兵。

類曲鈴木の後段を改めたるものなり。後段大間經正七十騎にて重家の落ち行くを追ひ懸け、路次に戦ひて終に之を生捕り、鎌倉へ引立つ。(元、元富)

備考鈴木參照。

二五五 おとどろはうぐわん 【髻判官】 別名衣川

シテ義經の靈。ワキ旅僧。所奥州衣川。

旅僧、衣川のほとりなる松樹の下に髻の切り捨てある見、之に立ち寄りんとしたる

に、義經の靈出で己の髻なりとて、人若し之に近づけば太刀風といふ風起りて其人を取る由を語り、又在りし世の判官の姿を現す。(正、新)

二五六 よし 【義經】

シテ義經の亡靈。ワキ都の僧。所陸中高館。時秋。

義經にゆかりある僧、高館に義經の古墳を弔ひて其靈に逢ふ。(新)

備考「世子六十以後申樂談儀」に「道もり、忠度、よし常、三番修羅が、りにはよき能なり」とあり。此に云へるよし常は此曲に非ずして八嶋を指せるなるべし。

二五七 のち はうぐわん 【野口判吉】 別名野口

シテ教信上人(義經の後身)の亡靈。ワキ衣川の僧。所播磨野口。

衣川の僧、野口の里なる教信寺に參り、義經の後身なる教信上人の亡靈に遭ひ、夢幻の間に、義經が衣川高館の城に戦死せんとしたる時、鞍馬山の天狗に救はれ飛行して

播磨に下り、後教信上人と號して此寺を開きたる由の昔語を聞く。(貞、元寫)

十 源賴朝及其一黨

二五八 〔雪賴朝〕

シテ鵜飼の老人。ツレ源賴朝。ツレ源次。ツレ源三。ワキ小野十郎高遠。ワキツレ林源五郎。ワキツレ郎等。狂言小野十郎の臣。所近江。時冬。

義朝都に敗れ、郎黨多く散りくとなり、主從僅に八騎になりて落ち下りたる時、賴朝一人雪中に踏み迷ひて落ち後れたるに、適々情ある鵜飼の老人に遭ひ、誘はれて其家に至る。こゝに小野の十郎、落人を捜し來り、賴朝の在るを知りて討ち入りしが、鵜飼の老夫二兒と共に戦ひて十郎等を斬り、賴朝を美濃に落す。(元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明とあり。又名寄に賴朝とあるは此曲の假稱なるべし。

二五九 〔眞田〕

シテ眞田與一貞成。ツレ岡崎義實。ツレ眞田郎等文藏。ツレ源賴朝。トモ從者。ワキ股野五郎景久。ワキツレ長尾新五。ワキツレ長尾新六。所相模石橋山。

石橋山合戦に、眞田與一が父義實の命にて股野と戦ひ、終に討たれしことを作る。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明とせり。又「翁草」いろは名寄「能の圖式」等に石橋山とあるは此曲の一名なるべし。

二六〇 〔空隱〕

前シテ土肥實平。後シテ走湯山大權現。ツレ源賴朝。ツレ岡崎義實。ツレ土屋三郎。ツレ土肥遠平。ワキ大場景久。ワキツレ梶原景時。ワキツレ大場從兵。狂言里人。所相模相山。時秋。

賴朝石橋山に敗れ、杉山にて大場に圍まれ、空木の中に隠れ忍びたる時、梶原平三の二心と、日頃念ずる走湯山大權現の功力とによりて不思議の命助かりたることを作

る。(新)

二六一 **【七騎落】**

別名 七騎落忍

シテ土肥實平。ツレ源頼朝。ツレ從騎五人。子土肥遠平。ワキ和田義盛。狂言船頭。所相模の海。

頼朝石橋山の合戦に敗れ、舟に乗りて安房上總の方に開かんとする時、主從八騎となりしを不吉の例なりとて、實平の子遠平を陸に残して出づ。翌日海上にて和田義盛の來るに逢ふに、遠平救はれて其舟にあり。實平父子邂逅を喜ぶ。(五)

備考 曲名「禪風習道目錄」に見ゆ。「能本作者註文」に作者不明とあり。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能の事見ゆ。「色葉運歩集」には七騎落忍とせり。

二六二 **【馬乞佐々木】**

別名 するすみいけずき・作々木・駒乞佐々木・駒與佐々木・馬與佐々木・馬爭・駒競

シテ佐々木高綱。ツレ源頼朝。ワキ梶原源太景季。ワキツレ從者。所前 相模鎌倉後 駿河浮島が原。

佐々木高綱出陣に際し、頼朝に乞ひて愛臣梶原にさへ賜はざりし名馬生食うまをくを賜はる。梶原浮島が原の陣にありて名馬生食の嘶を聞き、やがて佐々木が乗れるを知り、囊に頼朝に乞ひて賜はらざりしを怨み、共に死して恨を報いんとす。佐々木之を見、盗みたる馬なりと詐りて其憤を解き、共に轡を並べて戰場に向ふ。(貞、元寫)

備考 「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十二日の薪の能に金剛太夫がするすみ、いけずきを演じたる事見え、「言繼卿記」に永祿十三年六月廿三日松尾社の能三番の時佐々木を演じたる事見え、同書同年八月十八日の條に日吉太夫演能五番の内に佐々木を演じたる事見ゆ。

二六三 **【景季】**

別名 現在籠・梅源太

シテ梶原景季。ツレ梶原景時。ツレ梶原景高。ツレ郎等。ワキ僧。所攝津。時春。

梶原景季、生田の寺にて盛なる梅花一枝を乞ひうけ、之を箆に挿して奮戦したることを作る。(元寫、新)

二六四 **箆** えびら **別名** 箆梅

シテ梶原景季の亡靈。ワキ旅僧。所攝津生田。時初春。

梶原景季の靈、旅僧に箆の梅の謂を語り、又己が功名の昔を語る。(五) **ワセ** 生田川 六八

備考「能本作者註文」に世阿彌の作と記せり。「禪鳳習道目錄」に「源太の能」と見えたるは此曲を指すなるべし。

二六五 **梶原座敷論** かぢはらざしきろん **別名** 梶原・梶原座論・座敷論・座論

シテ梶原景季。ツレ梶原景時。ツレ文覺上人。ツレ武人數名。ツレ源賴朝。ワキ
畠山重忠。所相模鎌倉。

源賴朝文覺上人と共に平家追討に功ありし人々に會ひたる時、梶原景季己の功績の父

景時に超ゆることを論じ、上座を許され、其戦況を物語りて面目を施したることを作る。(貞、元寫)

二六六 **藤** ふぢ **戸** と 藤渡・藤門

前シテ漁夫の母。後シテ漁夫の亡靈。ワキ佐々木盛綱。トモ從者。所備前兒島。時
三月。

盛綱兒島に戦ひたる時、海路を漁夫に案内せしめたるが、功を己一人に收めんため密に之を殺したることあり。かくて勝軍の後、兒島を賜はり入部したるに、彼の漁夫の母來りて恨を云ひければ、盛綱哀に思ひその亡魂を弔ひて成佛せしむ。(五)

備考「禪鳳習道目錄」に曲名出づ。又「世子六十以後申樂談儀」の中、後人の追記と見ゆる項に永正十一戊の十月廿八日南都兩喜びの能に演ぜられたることを記せり。「能本作者註文」に世阿彌の作とあり。

二六七 **鱗形**

シテ辨才天女(前は化身)。ワキ北條時政。ワキツレ從者。所相模江島。

北條時政江島の神徳により鱗形の旗の紋を得たることを作る。(元、元寫、喜)

二六八 **鎧**

シテ北條時政。子源頼家?。ワキ源頼朝。ワキツレ秩父重忠。トモ從者。所相

模鎌倉。

頼家十三歳になりたれば、頼朝具足親を北條時政に頼みて具足の着初をなさしむることを作る。(新)

備考北條が鎧の謂を物語る一條によりて名づく。

二六九 **火鉢**

シテ太刀鬼丸の精。ツレ鬼神。ワキ北條時政。所相模鎌倉。時冬。

北條時政、鬼神に侵されて病に臥せるを、守刀鬼丸の精靈鬼神を平げて癒せしむ。(元寫)

備考ワキの謠に「寒風を防ぐ置火鉢」といふことあるによりて名づく。

二七〇 **橋供養** 別名相模川

シテ平教經の亡靈。子頼朝。ワキ秋父庄司重忠。ワキツレ北條、一條、板垣等數名。ワキツレ若宮別當。所相模川、時冬。

建久九年十二月、稻毛三郎重成の亡妻の菩提を弔ふ爲、相模川に橋を架し橋供養をなす。此供養の場に教經を初め平家一門の亡靈現れ妨をなさんとしたるが、重忠若宮別當と力を合せて之を退散せしむ。(評)

二七一 **九穴** 別名九穴玉

シテ龍神。ツレ源賴朝。ツレ梶原。ワキ秩父六郎重安。所相模由比が濱。時春梶原、秋父の六郎が君の覺えめでたきを妬み、之を殺さんため賴朝に勸めて龍宮に九穴の寶珠を取りに行かしむ。秩父、梶原の心を知れども君命いなみ難く、五とくの錦に身を固め若宮八幡江島辨才天を心に念じ海に入らんとするに、龍神其忠勤を嘉して珠を秩父に與ふ。(貞、元寫)

ニ七三 〔秩父〕 秩夫・秩生

シテ秩父重忠。ツレ秩父の臣丹三郎。ワキ安房の佐久間。ワキツレ佐久間從兵。所武藏秩父。

秩父重忠、其子重安、横の方の讒により由比が濱に斬られたるを憤りて叛をなす。之を聞きて安房の佐久間、郎等を引き連れ討手に向ひたるが、反て生捕らる。(正)

〔備考〕能本作者註文に作者不明とあり。

ニ七三 〔犀〕 別名犀川・和泉小次郎(甲)

シテ和泉小次郎。ツレ源賴朝。トモ從者。所信濃淺間山。時春。

賴朝淺間山の麓にて犀川の謂を聞き、家の寶とせんため和泉小次郎に命じ犀の角を取り來らしむ。小次郎犀川に入り犀と戦つて之を殺し角を賴朝に献じて勇名を馳す。(貞、元寫)

ニ七四 〔親衡〕 親平・近平 別名和泉小次郎(乙) (泉小次郎)・泉(甲)・籠破

シテ和泉小次郎親衡。ツレ傳小松原太郎。ワキ北條相模守。狂言北條の臣。所相模。

親衡千壽丸の亂に北條義時を討たんとして態と生捕られたるが、意の果し難さを知り、傳小松原の勸により籠を破つて勇戦し逃れ去る。(元寫)

〔備考〕禪風習道目錄に籠破の名見ゆ。又破籠の曲は別に春近あり。

二七五 **朝比奈** 淺日那別門破

シテ朝比奈三郎義秀。ツレ和田義盛。ツレ郎等。ワキ北條義時。ワキツレ從兵數名。所相模鎌倉。時建保元年五月。

和田一門北條義時を討たんとして兵を擧げたる時、朝比奈三郎勇戦して南大門を打ち破りしことを作る。(元寫)

【備考】能本作者註文「に河上神主(原註、和州十二太夫先祖)作と見ゆ。「大和田名寄」には朝夷とも書きたり。

二七六 **狩場重光**

シテ秩父十郎重光。ツレ郎等。ワキ川越太郎、ワキツレ川越郎等。所武藏野。時秋。

川越太郎、秩父重光に年來恨みありて、武藏野の狩に出でたるを道に討たんとし、互

の郎等戦ひたるが、國も同國、殊には一家の流なればと、心和ぎて打ち解け合ふ。(新)

十二文 覺

二七七 **戀塚**

シテ盛繼の妻の靈。ワキ旅僧。所山城烏羽。時秋。

旅僧、烏羽の戀塚にて塚の主(遠藤武者盛遠に殺されたる盛繼)の妻の靈に逢ひ、讀經して成佛せしむ。(正)

【備考】盛遠に殺されたるは源渡の妻袈裟なるを此曲には盛繼の妻とせり。

二七八 **瀧籠文覺** 瀧籠文學 瀧籠文學・文學瀧籠・文學瀧詣

シテ文覺上人。ツレ矜羯羅童子。ツレ制吒迦童子。所紀伊那智瀧。時十二月。

文覺上人難行の功を積まんと、十二月の寒天に那智の瀧に籠り、數千丈漲り落つる水

に五六町も流されたるが、所願空しからず二童子現れて瀧籠を成就せしむ。(正、元
寫、新)

二七九 **人形** ひとがたもんがく **別名人形文學**

シテ文覺上人。ワキ源頼朝。狂言頼朝從者。所伊豆奈古屋。

文覺上人頼朝と謀り、伊豆奈古屋瀧山の持佛堂にて赤白の人形を立て平家を調伏せし
ことを作る。(元寫、古寫)

二八〇 **文覺** ぶんがく **文學別名六代・六代文覺(六代文學)**

シテ文覺上人。ツレめのと(女)。ツレ齋藤五。ツレ齋藤六。ツレ狩野光持。子

六代。ワキ北條時政。ワキツレ從者。所前山城嵯峨。駿河千本松原。

平維盛の子六代、嵯峨大覺寺菖蒲谷にて北條時政に生捕られ、駿河千本松原にて誅せ
られんとするを、文覺申し請ひて赦免の下知を受け來り助けたることを作る。(元、元

寫)

備考「世子六十以後申樂談儀」に六代の曲名出づ。「能本作者註文」に文覺は河上神主
(原註、和州十二太夫先祖)作、六代は作者不明とし、別曲の如く扱ひたり。「運歩色葉
集」には文覺として出づ。

二八一 **齋藤五** さいとうご **別名齋藤五六代**

シテ齋藤五。ツレ齋藤六。ツレ文覺上人。子六代。ワキ北條時政。ツレ從兵。

トモ從者。所東海道。

前良齋藤五、齋藤六の兩人、預り居たる六代の捕へられたる跡を追ひ、近江神無の森に
て追ひ着き、時政に乞ひて共に關東に下る。六代千本松原にて彌々誅せられんとす
る時、許しの教書を持ちて馳せつけたる文覺の爲に死を免る。(元、元寫)

二八二 **維盛** いせい **是盛別名入水**

シテ平維盛の靈。ワキ武里。子六代。ワキ瀧口の聖。狂言村人。所紀伊那智の浦。

武里、瀧口聖、六代等の夜念佛の功力にて惟盛の亡靈現れ、入水の昔を語る。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に觀世小次郎作とあり。

三 承久亂

二八三 〔承久〕 別名千葉の介

シテ小次郎。ツレ母。ツレ鎌倉勢。子菊滿丸。ワキ千葉の介臣淺野(又は朝野)。狂言千葉の介家臣。所前下野千葉。後近江瀬田。

承久の亂に、千葉の介京に在りて病に臥し、出で立ちかねたるため、家臣淺野を郷里に遣はして長子小次郎を代官の爲呼び迎へしめんとしたるが、小次郎は鎌倉方に心を寄せたるため、弟菊滿が代りて京に上り、小次郎は鎌倉方に従ふ。かくて兄弟戰場に

見え、終に一騎討をなしたるが、人々寄りて二人を引き分け相引に引かしむ。(元、元寫)

二八四 〔光季〕 滿季

シテ伊賀判官光季。ツレ熱田の三郎。ツレ郎等。子壽王。ワキ三浦判官種義。ワキツレ佐々木高重。ワキツレ郎等。所小城京。時五月。

承久の戰亂に、鎌倉の代官光季、一子壽王と共に院の討手三浦種義が兵を迎へ、勇戦して終に討死す。(元、元寫)

備考「能本作者註文」に觀世小次郎作とあり。

二八五 〔治時〕 別名秦・秦治時

シテ秦治時。ツレ治時の妻。子玉若。ワキ深野某。所隱岐。時七月。

秦治時承久の亂に囚れて隱岐の國に流されたるが、それより十餘年を経て一子玉若父

を慕ひて配所に下り、治時の誅せられんとする前日、對面するを得て共に死なんことを乞ひて止まず。終に最期の際に父の頸に抱きつきて共に斬られんとす。其孝心の爲囚人奉行の深野感に入りやがて身に代へて公方に治時の命を請ひ、終に赦免を受け得たり。(元寫)

二八六 せらだ 瀬良田 世良田

シテ瀬良田刑部。子龜若。ワキ坂田兵衛定次。ワキツレ箱根權僧都(瀬良田の弟)。狂言從者。所出羽坂田。時秋。

承久の合戦に京方の侍なりし瀬良田刑部、捕へられて出羽の坂田の館に預けらる。坂田は瀬良田の一子龜若を養ひ居たるも瀬良田と好からず。由りて上意に事寄せて瀬良田父子を斬らんとす。こゝに瀬良田の弟箱根權僧都、鎌倉に訴訟して瀬良田の赦免狀を得、出羽に下りたるに、折から坂田が彼の父子を斬らんとする所なりしかば、ここに忽ち坂田の私心露顯す。瀬良田憤つて坂田と刺し違へんとしたるが、權僧都の詞

に従ひ、其罪を問はず共に和睦の宴をなす。(新)

二八七 たかむら 小野篁

シテ小野篁の亡靈。ツレ後鳥羽院。ワキ後鳥羽院北面武士。所出隱岐へ行く海路。後隱岐國篁の墓畔。

後鳥羽院の北面の武士何某、隱岐に流されさせ給へる院を尋ね參らせんとて隱岐に渡らむとす。篁の靈船頭に化して彼の武士を渡し、名を名のりさして消え失す。院これを聞こしめし篁なるべしとて其靈に音信れ、何某と共に弔をなす。篁の靈やがて現れ逆臣を亡ぼし逆鱗を息め奉るべき由申す。(元寫)

備考史には篁一度隱岐に流されたるもやがて免されて歸りしことを記せり。それを篁隱岐に死しかく奇特を見せたるやうに作れり。

十三 最明寺時頼

二八八 鉢木

シテ佐野源左衛門常世。ツレ常世妻。ワキ最明寺入道。所前上野佐野。後相模鎌倉。時前冬。

最明寺時頼、廻國の途上野佐野にて雪中に迷ひ、常世の家に一夜の宿を借る。常世粟飯を進め、秘藏の鉢植の木を燃いてもてなし、本領を横領せられし身の不遇をかこち、今にても鎌倉に事あらば一番に馳せ參ずべしと語る。入道歸りて後諸國の軍勢を集めたるに、一番に來りたるは常世なり。よりて本領に安堵せしめ、且つ鉢の木を謝禮に三ヶ庄の地を與ふ。(五)

備考「能本作者註文」に世阿彌作とあり。

二八九 浦上 別名浦下部(浦壁)

シテ浦上親春(浦上一に浦下部に作る)。ツレ親春の老母。子花若。ワキ最明

寺入道。所肥前浦上の里。

最明寺入道行脚の途浦上の里なる親春の家に宿り、親春が所領を失ひ妻に別れたる失望の爲出家せんとし、老母と子との悲める様を見て、教書を與へもとの所領に安堵せしむ。(元、元寫)クセ浦下部三八四

二九〇 藤榮 藤永

シテ芦屋の藤榮。ツレ藤榮從者。ツレ鹽屋の主(月若の臣)。ツレ鳴尾何某。ツレ鳴尾家人。子月若(元地頭家俊の息)。ワキ最明寺實信(時頼)。狂言鳴尾下人。所攝津芦屋の里。

最明寺入道、行脚の途次、芦屋の里にて叔父藤榮に所領を奪はれたる月若に逢ひ、其所領を返し與ふることを作る。(明曆外、寶、喜、剛、春)

備考「世子六十以後申樂談儀」に此曲名見ゆ。「能本作者註文」に作者不明。文中自然居士の文を借りたる所多し。